



飯田 A 遺跡 石組み（南東から）



飯田 A 遺跡 土坑 2（南西から）

写真図版 8



飯田 A 遺跡 作業場 1 (南西から)



飯田 A 遺跡 作業場 1 造成土断面 (西から)



飯田 A 遺跡 作業場 1 調査風景（北から）



飯田 A 遺跡 同上 完掘後（北から）

写真図版10



飯田A遺跡 作業場1（北東から）



飯田A遺跡 眼鏡18出土状況（南東から）



飯田A遺跡 土坑3（南東から）



飯田A遺跡 土坑4・5（東から）



飯田A遺跡 作業場1 カマド（南から）



飯田A遺跡 同上 瓦積み（南東から）



飯田A遺跡 物原調査前（東から）



飯田A遺跡 同上 調査風景（東から）



飯田A遺跡 物原A—A'ライン断面（東から）



飯田A遺跡 同上B—B'ライン断面（北西から）



飯田A遺跡 物原A-A'ライン断面（北西から）



飯田A遺跡 磚25・26出土状況（北西から）



飯田A遺跡 物原東側断面（西から）



飯田A遺跡 物原B-B'ライン不良製品堆積状況（北から）



飯田 A 遺跡 作業場 2 調査風景（東から）



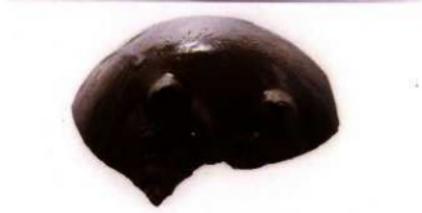
飯田 A 遺跡 建物 2（東から）



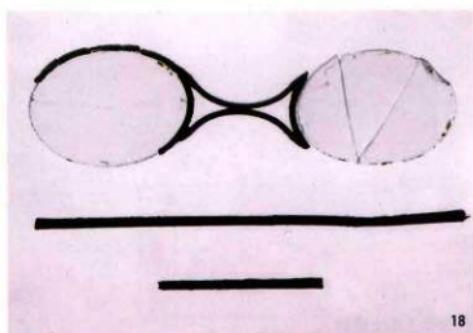
飯田 A 遺跡 建物 3 (東から)



飯田 A 遺跡 物原出土品 (左から) 烧道具・築材・不良製品



飯田A遺跡 作業場1出土遺物

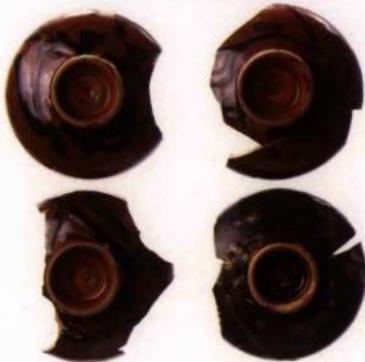




8



12



13



19



20



28

飯田 A 遺跡 作業場 1 出土遺物



17



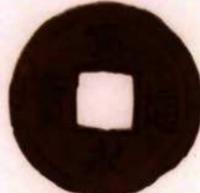
22



21



23



24





飯田A遺跡 出土陶器

写真図版24



36



39



40



37



41



43



44



46



42



45



47



48



49



50



51



53



52



56



59



54



55



58



60



61





飯田A遺跡 出土陶器

写真図版28



飯田 A 遺跡 出土陶器



92



93



94



95



96



97



98



99

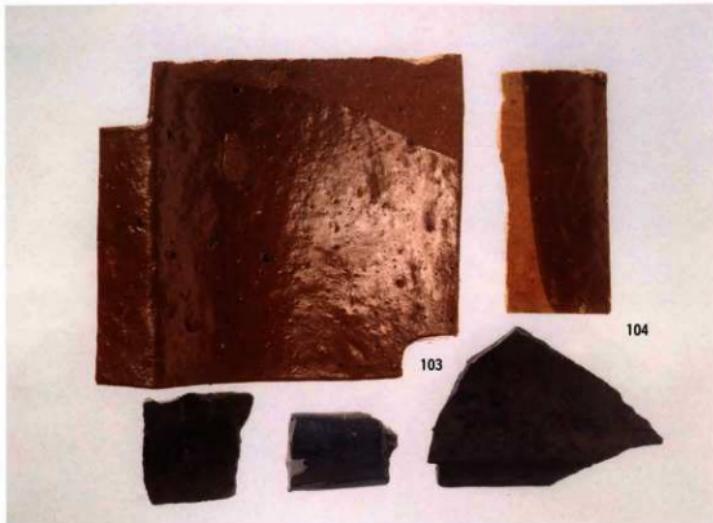


100

101

102

飯田A遺跡 出土陶器



飯田 A 遺跡 出土瓦・窯道具



129



130



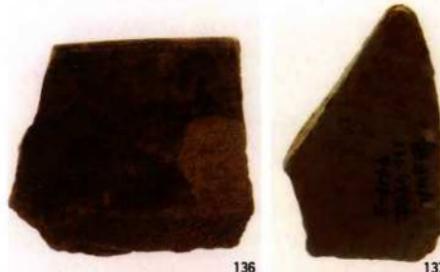
131



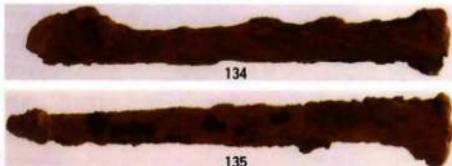
132



133



134



135



90



飯田 A 遺跡 出土陶器・磁器

第4章 長東坊師窯跡

第1節 調査前の状況と調査の経過

1. 調査前の状況

長東坊師窯跡は浜田市上府町の久代川上流の谷奥に位置し、島根県遺跡地図（文献12）には「ト中屋窯跡」として記載されている。遺跡周辺にはほとんど平野が無く、狭い谷に僅かに集落が営まれている。この様な立地によるものか、周辺では窯業・鋳造等の近世・近代の生産遺跡のみ確認されている。調査前の遺跡は杉や雑木が鬱蒼と茂り、その隙間からかろうじて登り窯を確認できる程度だったが、立木伐開後は登り窯・作業場平坦地・長方形の土坑群を地表面で確認できた。登り窯の北側は平坦地が道路建設用地の東まで広がっていた。調査前の登り窯は最後尾から約10mのところで、北西から南東に向かう重機道に切られる状況だった。遺跡周辺は陶土が豊富であり、重機による陶土採掘や不要な土の廃棄が盛んに行われている。このため登り窯の大口（燃焼室）や、人口に近い窯は既に削平されていると考えられた。

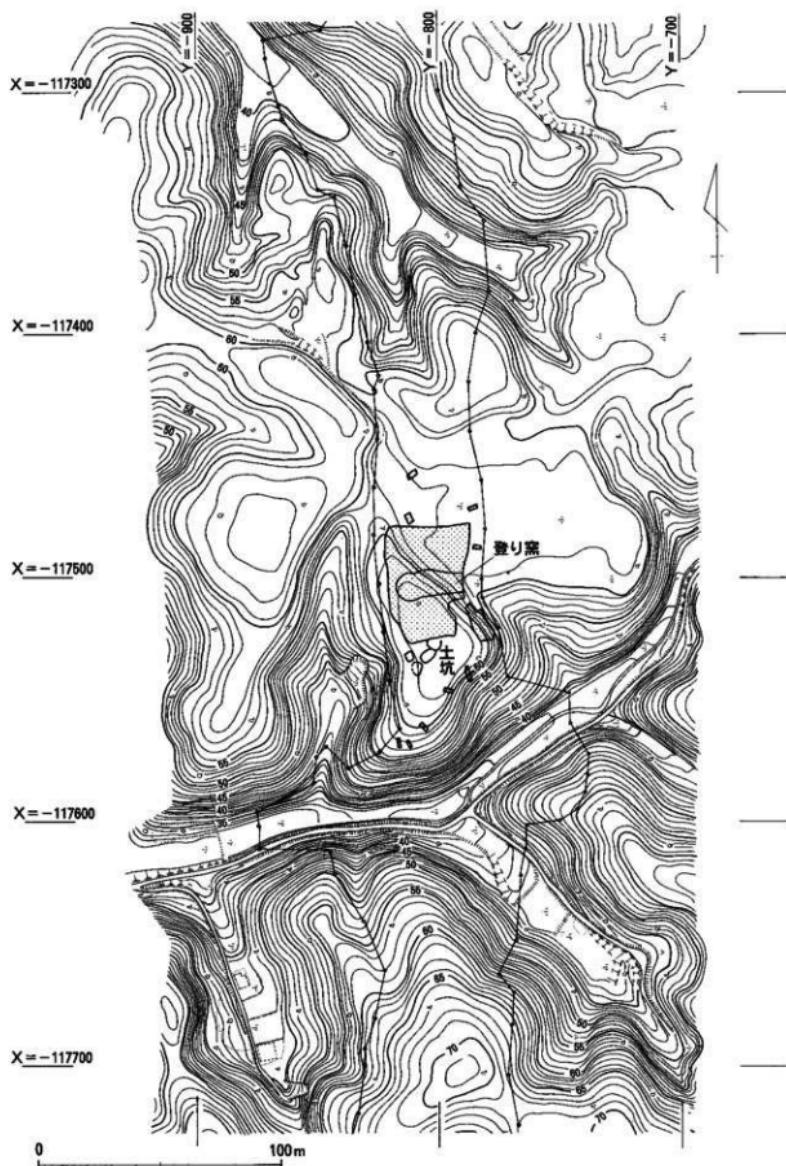
2. 調査の経過と概要

調査範囲確定のためのトレンチ調査は平成10年4月21日に開始した。トレンチを設定したのは、地表観察で遺構を確認できなかった登り窯北側の平坦地と南側の緩斜面部分である。その結果、遺跡南部のトレンチから遺構は検出されなかったが、北側平坦地に設定したトレンチは人力掘削では確認できないほど旧地形が深く埋没していることが分かり、4月28日にトレンチ調査を終了した。

本調査は平成10年8月3日に開始した。初めにトレンチ調査で旧地形を検出できなかった北側平坦地の重機掘削から行った。その結果この平坦地は後世に陶土掘削の際不要になった粘土を大量に廃棄したもので、旧地形までの深さは用地の東端で約4mもあることが判明した。さらに、その下に埋没した登り窯は当初予想したよりも倍近い規模で、用地外に続いていることも分かった。このため、初めに重機を使用して遺構近くまで旧地形を検出し、その後改めて調査範囲を検討することにした。

盆休みを挟み、8月24日から人力による掘削を開始した。登り窯の検出作業から行い、任意の主軸を設定して北側から掘り下げた。登り窯はカマズヤ（上屋）と甲（天井）は残っておらず、窯の内部には床面まで後世の廃土が充満していた。しかし、廃土を除くと床面には不良製品や窯道具が一部原位置で残されていた。また、廃土に埋没していた前方の窯ほど火格子や側壁の残存状態が良かった。登り窯の北では遺構・遺物とも確認できなかったので、9月4日に掘削を終了した。登り窯南側の掘削は9月7日から開始した。調査前は平坦になっていたが、北側同様に後世の廃土が堆積したもので、廃土除去後は土坑4基を検出した。土坑はこれらの南側でさらに3基確認していたが、土量が多く性格も不明だったので地表面で規模を測量するに留めた。また、これと平行して作業場跡と思われる平坦地の調査を行い、建物跡1棟と土坑4基を検出した。

10月1日には登り窯の床面に残されていた遺物の実測と取り上げを終え、ラジコンヘリによる空撮を行った。その後登り窯の断ち割りを行い、各断面の実測と写真撮影を行った。10月20日には盛土内で検出した瓦積みが、古い登り窯の盛土をL字形に囲んだもので、窯の増築を行っていることが判明した。このため全ての盛土を除去して古い煙出しの確認を行ったが明確には検出できなかっただ。10月26日に瓦積みと登り窯の縦断土層の実測を終え、現地調査を完了した。



第23図 長東坊師窯跡 調査区配置図 ($S = 1/2000$)

第2節 調査の結果

1. 登り窯

増築後の登り窯（第24～28図、写真図版34～42）

検出した登り窯は、人口が調査区外に埋没しているため正確な窯（焼成室）の数を把握できなかった。このため遺跡周辺で調査された登り窯の規模を参考にして、大口・寄窯（1番窯）・2番が調査区外にあり、これに調査区内の3～11番、ふかせ（素焼き物焼成）、付属房（素焼き物焼成・乾燥）と続く構造だったと推測した。3～9番までは丘陵東斜面を削除し、10番以降は尾根上に最高2.1m盛土して窯用地を造成している⁽⁷⁾。カマズヤと甲は既になかったが、廃土に埋没していた7番以下の窯は床上にアゼや瓦が堆積していた。以下、増築後の状態から記述する。

増築後の登り窯は第12表に各部の計測値を示した。後方にいくにつれて窯の規模が大きくなっている。ツキスエは高温の為前方に迫り出しているものが多く、1番や10番は焚窓をかなり塞いでいる。火格子は基本的に8～12cmの間隔をあけながら小トンボリを2個重ねて造られていた。4・9番奥壁の火格子には、煉瓦を立てたり3個組み合わせたものが見られるが、奥壁や火格子の改修を行った可能性がある。窯の勾配は6番が5寸勾配⁽⁸⁾、11番とふかせが3.5寸勾配でそれ以外が4.5寸勾配だった。石見焼の丸物窯としてはかなり急な勾配といえる。付属房の背後には煙出しの穴が無く、南側に熱が抜けるようになっていた。南隅では煙突の基底部と思われるものを検出したが、この登り窯ではここだけ甲が残っていた。甲は築窯材をアーチ形に組み、隙間に焼き台を詰めている（写真図版40）。また、残存状態の悪かった5番以外の各窯側面では、「火の見」⁽⁹⁾のための穴を検出した。

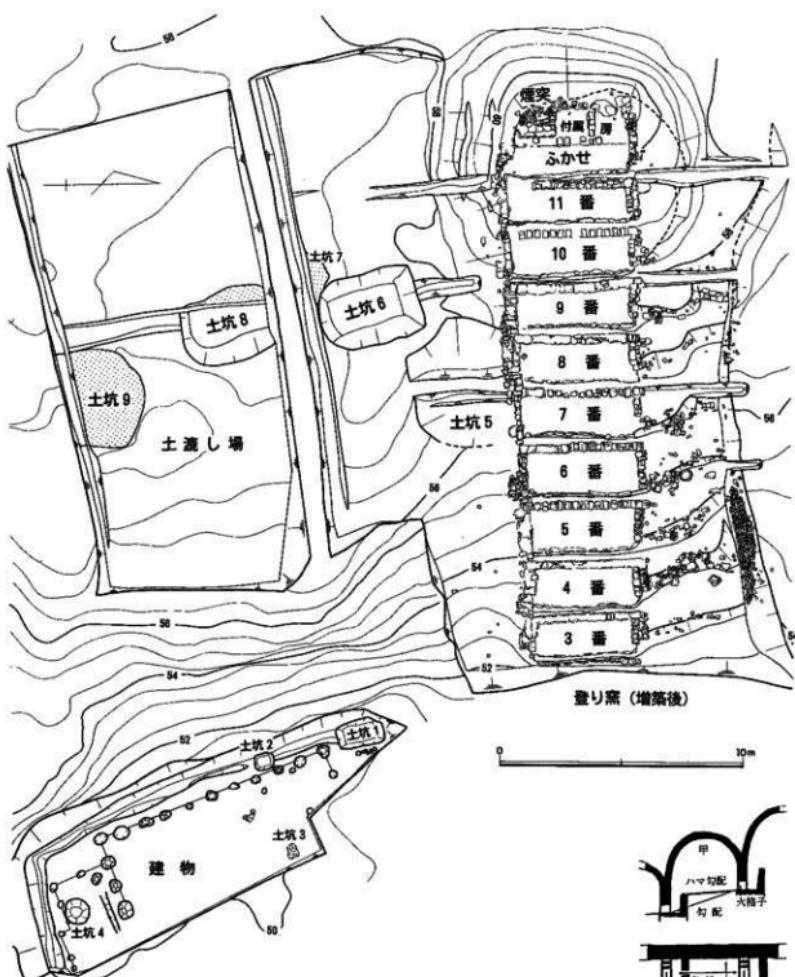
窯の出入り口は北側に造られており、3～10番では自然地形を段状に造成した作業場を検出した。作業場の法面には窯道具・アゼ・不良製品を積み上げた土留めを施している。11番から後方の作業場は、地表に露出した盛土上に造られていたため、既に流失したものと考えられる。このほか5・9番の作業場からは、カマズヤの礫石と思われる石を検出した。また、6番の作業場隅には壺（78）を埋設していた。作業場の北側は大型の焼き台やアゼを並べた階段状の地形になっていた。トレチで横断面を観察すると、元は溝だった所を埋めて造られたことが分かった。溝は窯の排水施設と考えられるが、何らかの理由で埋められたと考えられる。作業場の北側は旧地形と窯の勾配に差があるため、地山を急角度に掘り込んで壁を造り、窯道具・築窯材を積み上げていた。上層断面から溝が埋められる以前に造られたことが分かる。

盛土部分の横断土層を確認するために設定したトレチ（第28図A-A'）では、不良製品の瓦が整然と積み上げられており、その内外に盛土を二分していた。瓦積みより内側の盛土は遺物を含まない地山・旧表土の混ざった上で、これに対し外側の盛土は不良製品を主体にしたものだった。断面を観察すると、外側の盛土の積み方は初め斜めだったものを、その後水平に変えたことが分かる。また、盛土間にススと不良製品の層が挟まれていた。盛土はそれぞれ内側が11番構築時に、外側がふかせ・煙突を増築する際に築かれたと考えられる。

(7) 石見焼の登り窯で尾根上に盛土して構築した例は希だが、大田屋窯跡調査区外で1基確認されている。

(8) 1寸勾配とは、水平距離1尺に対し1寸立ち上がる傾斜面の度合いをいう（文献8）。

(9) 粘土を5cm位の輪にして台を付け、製品と同じ軸架をかけて温度の出にくい窯所に置き、取り出して焼け具合を確認する。（文献8・23他）



第12表 長東坊師窯跡 叠り窯各部寸法測定表

単位(m)

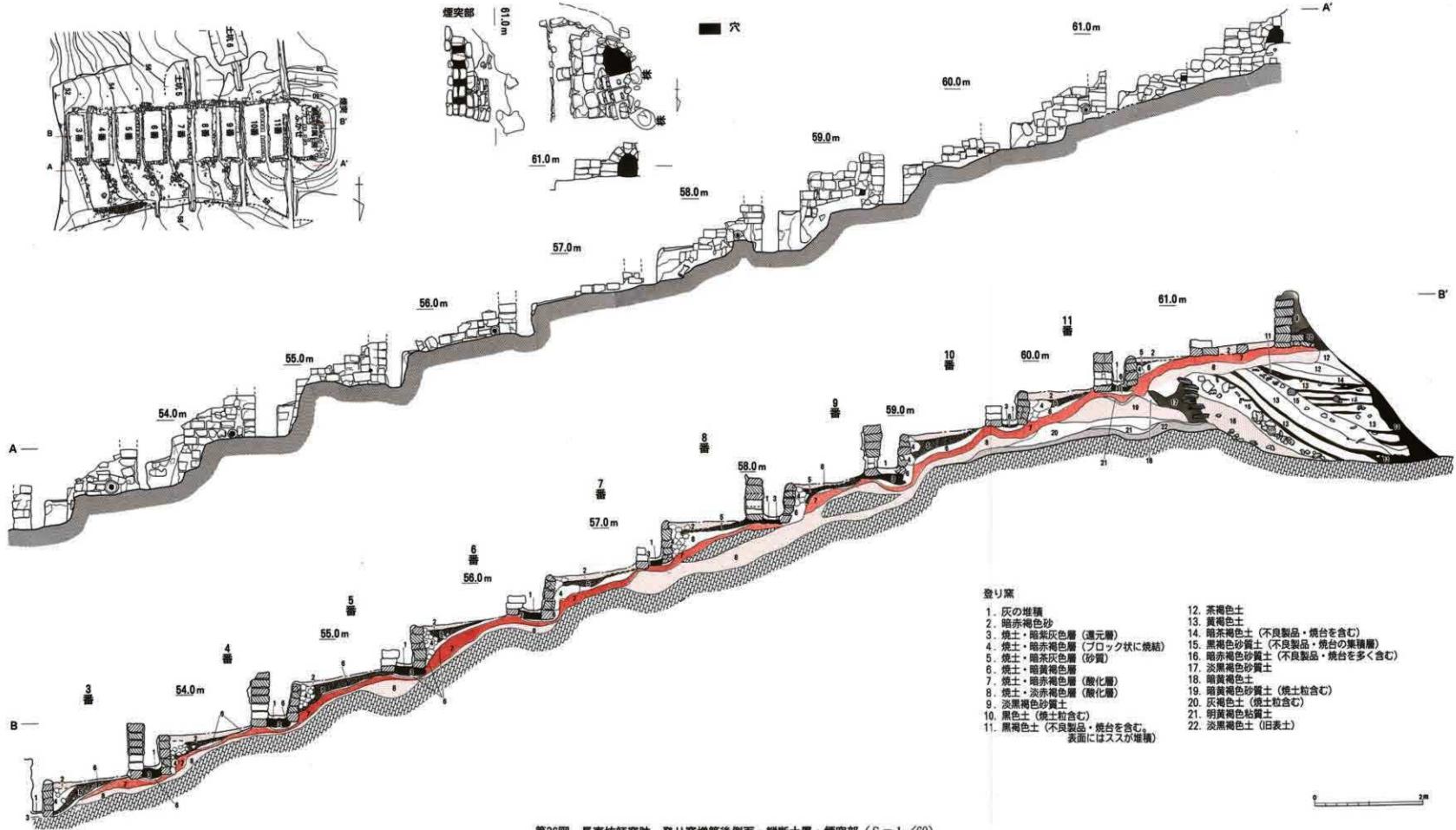
区分	部位	3番	4番	5番	6番	7番	8番	9番	10番	11番	ふかせ	付風扇
ハマ(床)	木敷引(幅)	4.0	4.9	4.2	4.5	4.6	4.5	4.6	4.8	4.9	4.7	3.0
	奥行	1.3	1.5	1.6	1.7	1.6	1.4	1.4	1.5	1.2	—	1.1
	勾配	5°	11°	11°	12°	10°	5°	10°	7°	6°	2°	5°
	幅	0.2	0.3	0.4	0.3	0.4	0.3	0.4	0.4	0.3	0.2	—
焚室	深さ	0.7	0.8	0.7	0.3	0.7	0.6	0.7	0.7	0.6	0.5	—
	勾配	24°	24°	24°	27°	22°	24°	24°	24°	23°	20°	—
	幅	4.5	4.2	3.9	3.7	3.4	1.6	2.0	2.0	?	?	—
作業場	奥行	1.5	1.4	1.2	1.8	1.1	1.2	1.2	1.0	?	?	—
	高さ(下段)	0.6	0.6	1.0	0.9	0.8	0.7	0.9	1.0	?	?	—

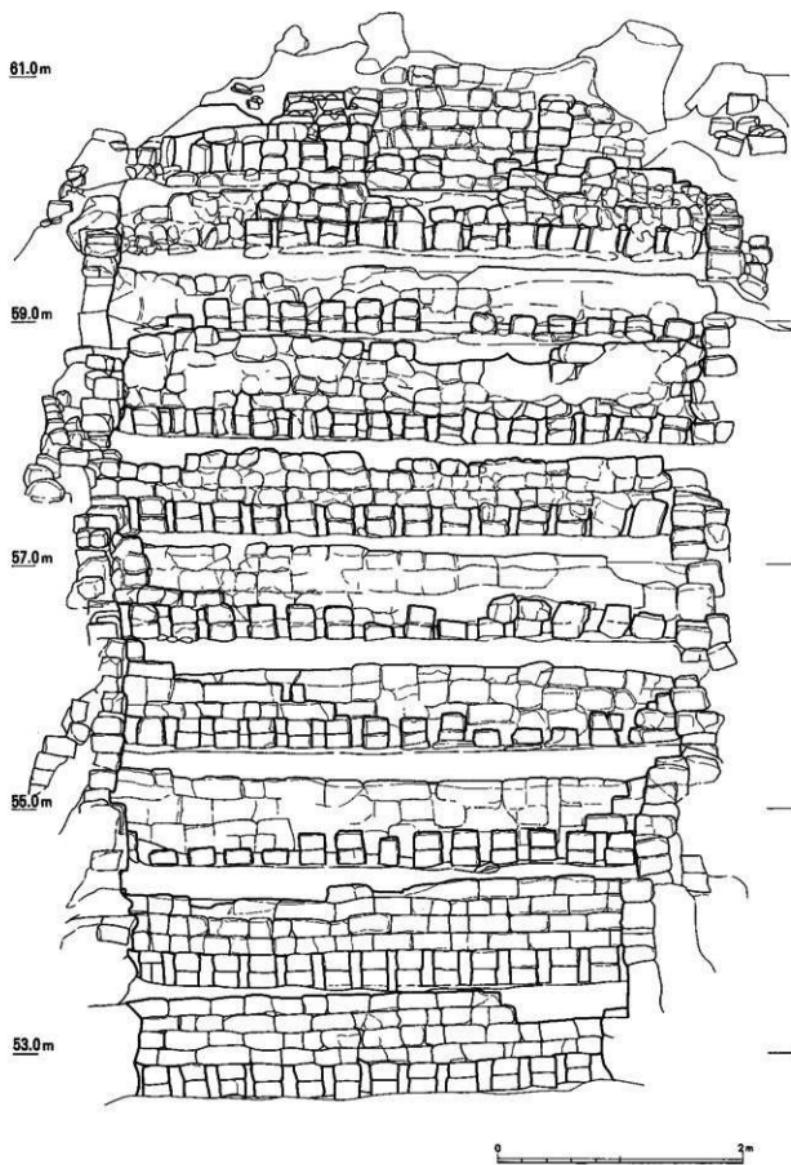
丸物窯模式図(部分)
※文献5より引用

第24図 長東坊師窯跡 造構配置図 (S = 1/200)

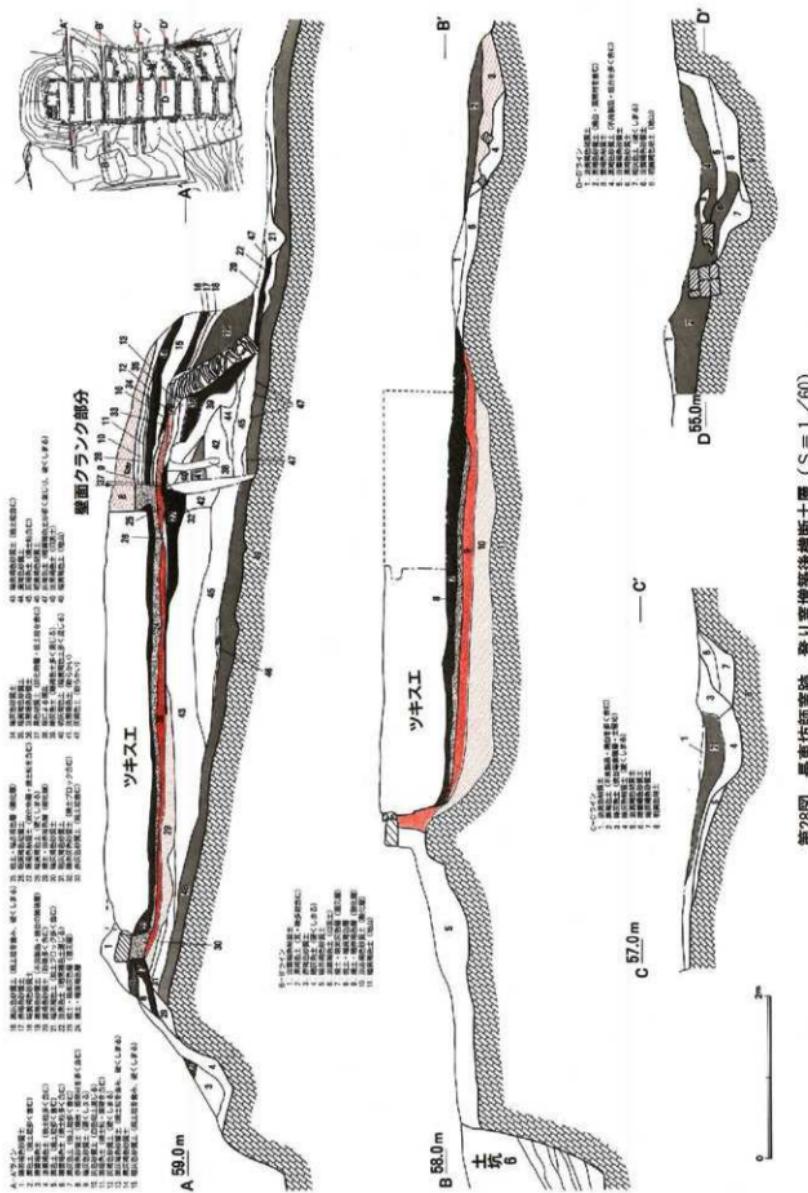


第25図 長東坊跡 登り窯増築後平面 (S = 1/60)





第27図 長東坊跡 登り窯増築後立面 (S = 1 / 40)



第28図 長東坊師窯跡 登り窯増築後横断土層 (S = 1 / 60)

増築前の登り窯（第29図、写真図版43～44）

増築前の登り窯に関する遺構として、盛土内で瓦積み・古い盛土・アゼの並びを検出した。また、全ての土留め・盛土を除去した後、窯の北側で溝状遺構と土坑10、ピット3基を検出した。

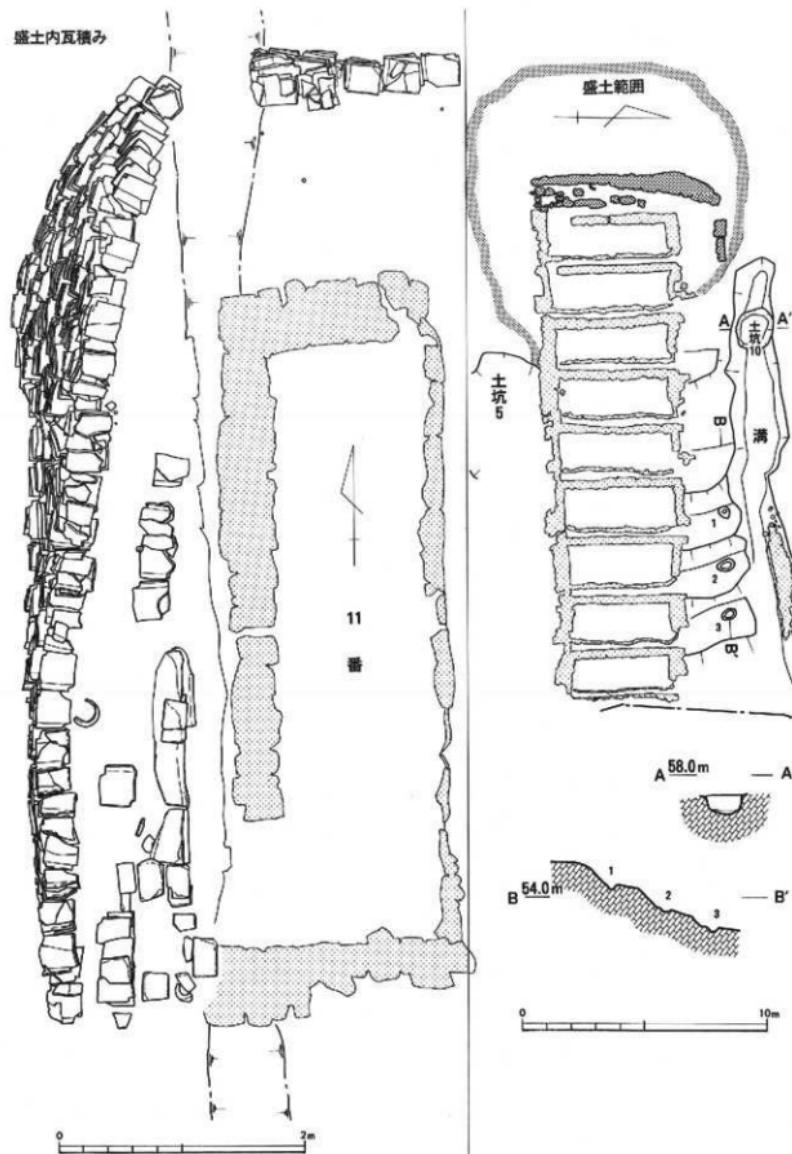
瓦積みは古い盛土の北側と西側をL字状に囲んでいた。西側は増築以前の登り窯の最後尾を補強したもので、北側はこの段階の盛土上に造られた作業場の崩壊防止を意図したものと考えられる。瓦積みで囲まれた古い盛土は不良製品を含まず、黄褐色砂質土で表面を覆って体裁を整えていた。また、古い盛土上面の南よりには、西側瓦積みと平行してアゼや瓦が並べられていた。これ以外増築以前の登り窯に伴うと思われるトンバリ・アゼの並びを検出していない。瓦積みに使用された瓦は全て不良製品の棧瓦で、窯道具を挟んだ状態で2～4枚が熔着していた（写真図版44）。古い盛土・アゼの検出状況やこれらを開む瓦積みの表面にススが付着していることから、増築前の登り窯は11番の後ろに煙出しが付く構造であったと思われる。なお、これ以前に全く盛土の無い時期があったのかは判断できなかった。

登り窯北側の地山面で検出した溝は、幅1.6～2.2m、深さは50～70cmで、横断面は逆台形である。登り窯の最終段階では埋められて階段状の地形にされていた。この溝の9番北には平面不整長方形の土坑10が掘られていた。溝の線上に位置するので何らかの関係がある遺構と思われる。

ピットは4～6番窯の作業場を地山面まで掘り下げる段階で検出した。各作業場平坦地の北西角に寄せて掘られ、直線上に並んでいるので上屋を支える柱を据えていたと考えられる。増築後の登り窯に伴う作業場では礎石を確認しているので、古い登り窯に伴うものと判断した。



長東坊師窯跡 調査風景



第29図 長東坊師窯跡 登り窯増築前 (S = 1/200)、盛土内瓦積み (S = 1/40)

2. 建物（第30～33図、写真図版45～47、49～51）

登り窓南東の標高50～52mの斜面を大規模に削平して平坦地を造成している。平坦地の規模は5×15m以上で、北側と東側は調査区外になるため正確な規模は不明である。壁面は急角度に掘られ、壁面と床面の接する部分は幅80cm以下の溝が設けられていた。排水用の溝と思われ、西壁の中央部分が浅く北側と南側に傾斜しているので、南北に排水していたようである。また、壁際には土坑が2基掘られていた。いずれも平面長方形、断面逆台形の整った形態である。上記の溝が接しているので、中に水を蓄えた施設を想定できる。土坑1は東側にアゼを並べており、土坑内から肥前系（1・2）と産地不明（4）の陶器、カワラケ（3）が出土している。全て細片だが、近世の遺物である点が注意される。土坑2からは植木鉢（5）・盛鉢（7・8）等が出土した。

平坦地の床面では礎石11個と礎石を据えていたと思われる窓みを15個所を検出した。作業用の礎石建物1棟を建てていたと考えられる。礎石の並びは調査区外に続く可能性が高く、柱配置の全容は不明だが、中心となる建物の南側に奥行き2.4～2.8mの張り出し部分が付いている。柱間は、建物の中心部分はほぼ1mに統一されている。これに対し建物南側の張り出し部分は、40・80・100・120cmとバラバラな数値であるが、基本的に20cmの倍数になっている。このほか建物の範囲内では土坑を2基検出している。土坑3は周辺が幅7～20cm、厚さ3cmにわたって赤く変色している。土坑の壁面に合わせて10が据えられ、床面には炭が堆積しており、囲炉裏と思われる。また、土坑3から2.3m南東の床面も焼けており、この辺りで火が使われていたと考えられる。このため建物の中心部分の床は土間だったと推測される。

土坑4は建物南側の張り出し部分壁際に位置し、土坑内で11～14が、周辺で15～18が出土している。土坑4は位置や規模、周辺で「カンモ」（18）が出土したことから、ろくろを据えた穴の可能性が考えられ⁹、南側の張り出し部分はろくろ座だったと推測される。

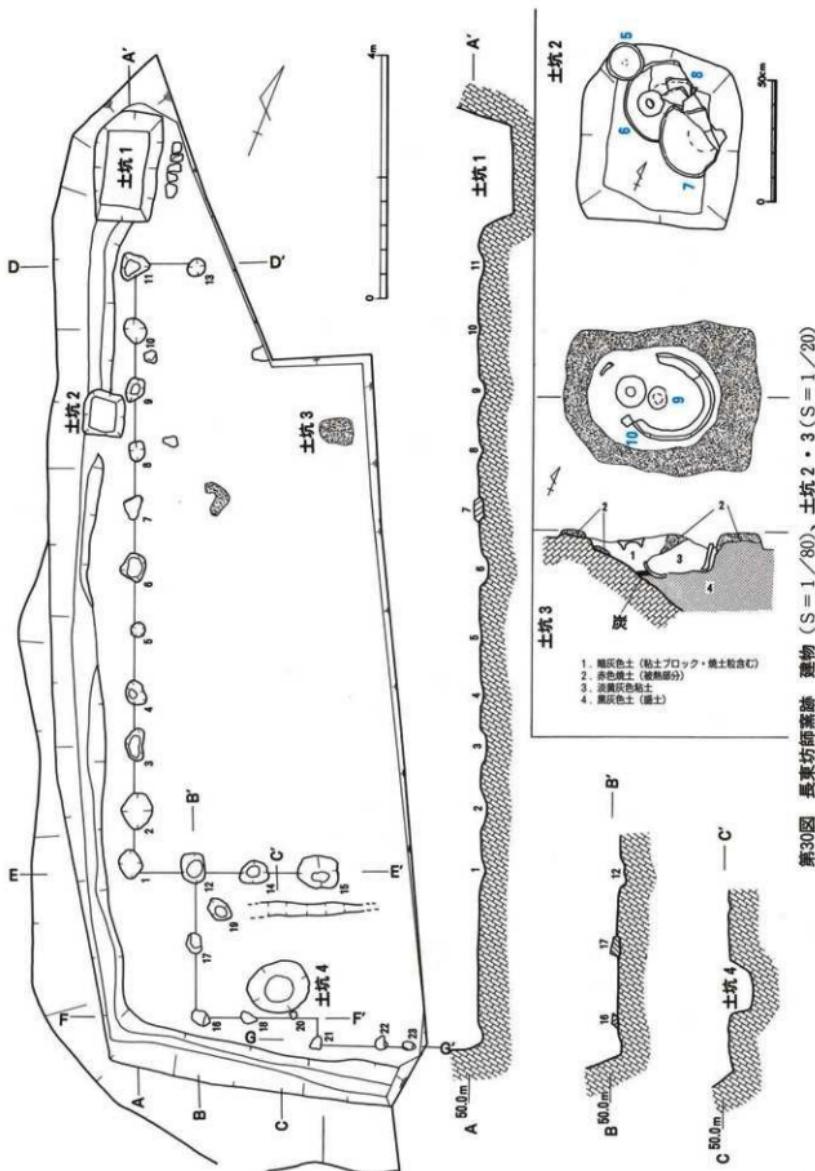
第13表 長東坊跡 建物計測表

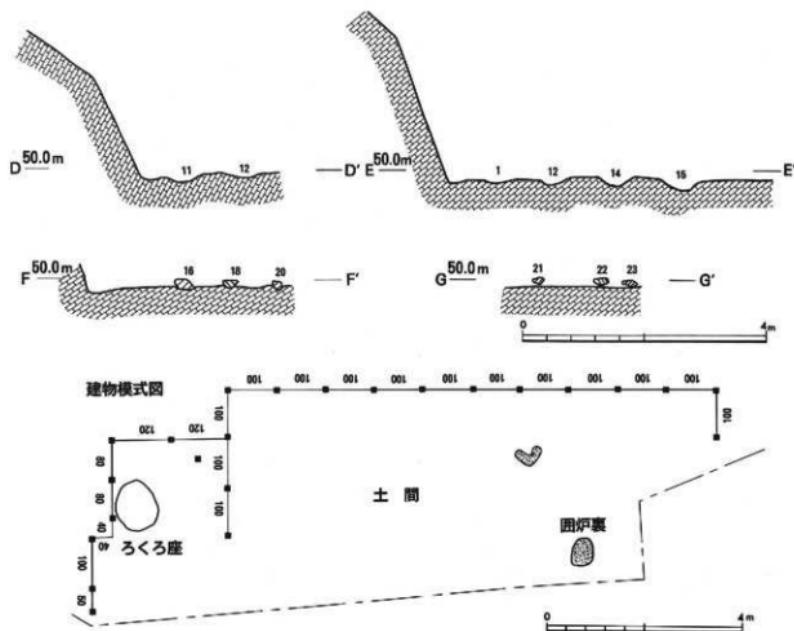
構 造	東 行 古						西 行 古					
	3間以上			N-22°-W			12間			S-22°-E		
主 動												
礎石・穴												
番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面規模(cm)	49×40	59×51	54×30	40×34	25×26	48×45	41×26	33×26	41×29	46×35	52×42	50×41
標高(m)	上面	?	?	?	?	?	?	49.96	?	?	?	?
	49.75	49.74	49.74	49.79	49.82	49.71	49.80	49.80	49.77	49.85	49.80	49.75
番号	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	23
平面規模(cm)	31×29	49×39	68×52	33×23	33×23	28×19	41×30	15×13	23×19	23×22	22×14	22×14
標高(m)	上 面	?	?	?	49.98	50.02	49.99	?	49.98	50.02	50.04	50.02
	49.86	49.76	49.70	49.86	49.83	49.86	49.87	49.86	49.94	49.92	49.90	49.90
柱間距離(cm)	1-2	2-3	3-4	4-5	5-6	6-7	7-8	8-9	9-10	10-11	11-12	12-14
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
	100	11-12	16-17	17-12	16-18	18-20	21-22	22-23				
	100	100	120	120	80	80	100	50				

第14表 長東坊跡 土坑1～4計測表

番号	上面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主 軸	出土遺物	備 考	
	底面形	長軸(cm)	短軸(cm)					
1	長方形	194	104	54	N-17°-W	陶器・カワラケ	水槽？	
	長方形	124	66					
2	方形	71	68	20	N-16°-W	陶器・窯道具	水槽？	
	方形	54	43					
3	横円形	81	59	18	N-64°-E	陶器・窯道具	囲炉裏	
	横円形	55	44					
4	横円形	103	88	40	N-64°-E	陶器	ろくろを設置か？	
	横円形	50	43					

⁹ ろくろ座は板敷きになっており、ろくろは板敷きを80cm角に切り開いて据えてある。職人は逆光を避けるため明かり窓を背にしてろくろに向かうので、ろくろを据える穴は實際に設けられる（文獻23）。

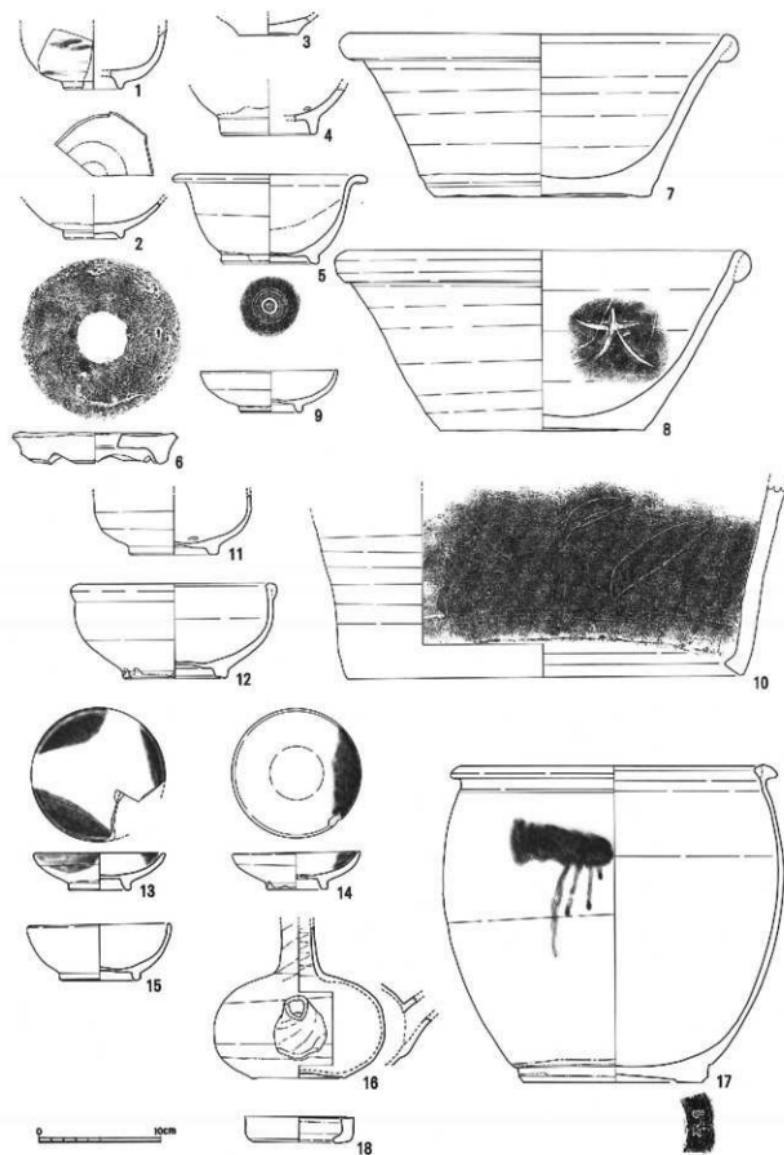




第31図 長東坊師窯跡 建物断面 ($S = 1/80$)、建物模式図 ($S = 1/100$)



岐田窯業所のろくろ座 (平成13年1月撮影)



第32図 長東坊師窯跡 出土遺物① (S = 1/4)



第33図 長東坊師窯跡 出土遺物② (S = 1/1)

第15表 長東坊師窯跡 建物出土遺物観察表

序号	写真 四版 番号	遺物 番号	種別	器種	寸法(cm)					胎土	被覆	出土地点	備考	
					a	b	c	d	e					
32	49	1	陶器	中罐	?	?	(5.0)	—	—	灰色	並釉	土坑1	外面に聚合	
32	49	2	陶器	小壺	?	?	(5.0)	—	—	淡灰白色	並釉	土坑1		
32	49	3	土師器	小壺	?	?	(4.8)	—	—	淡白黄色	並釉	土坑1		
32	49	4	陶器	中鉢	?	?	(6.2)	—	—	淡白灰色	並釉	土坑1		
32	49	5	陶器	埴木鉢	16.0	7.4	8.1	—	—	明褐色	並釉	土坑2		
32	49	6	窓道具	ハリ	13.5	2.5	4.4	—	—	淡青褐色	—	土坑2	指記号有り	
32	49	7	陶器	盤鉢	(32.6)	13.5	17.5	—	—	明茶褐色	—	土坑2	素焼き	
32	49	8	陶器	盤鉢	33.9	14.9	16.7	—	—	明茶褐色	—	土坑2	素焼き 外見に「大」の雑則	
32	49	9	陶器	小壺	11.0	3.5	5.2	—	—	淡褐色	並釉	土坑2		
32	49	10	陶器	五徳	?	?	32.1	—	—	明褐色	—	土坑3	素焼き	
32	49	11	陶器	片口	?	?	7.4	?	—	淡灰褐色	並釉	土坑4		
32	50	12	陶器	片口	(16.7)	7.7	8.6	?	—	淡褐色	並釉	土坑4		
32	50	13	陶器	小壺	10.5	3.0	5.1	—	—	明褐色	並釉	土坑4	部分的に鉄釉	
32	50	14	陶器	小壺	10.2	3.1	5.0	—	—	灰色	並釉	土坑4	部分的に鉄釉	
32	50	15	陶器	中鉢	11.5	4.6	6.6	—	—	青灰色	並釉	土坑4周辺		
32	50	16	陶器	水注	?	8.4	7.5	14.0	—	—	灰色	並釉	土坑4周辺	
32	50	17	陶器	中壺	(26.2)	26.0	15.5	27.8	—	淡青褐色	素燒	土坑4周辺	網部に「波」	
32	50	18	陶器	カンモ	8.9	2.1	5.5	—	—	灰色	並釉	土坑4周辺	ろくろ器品	

第16表 長東坊師窯跡 出土古銭観察表

序号	写真 四版 番号	遺物 番号	名 称	理別	材質	寸 法(cm)					初降年代	出土地点	備 考	
						a	b	c	d	e				
33	51	19	直木通宝	錢銅	真鍮	2.7	2.7	2.1	2.1	0.9	0.9	文政4(1821)年	遺物	真鍮四文銭
33	51	20	寛永通宝	錢銅	真鍮	2.7	2.7	2.1	2.1	0.9	1.0	文政4(1821)年	遺物	真鍮四文銭

3. 土 坑

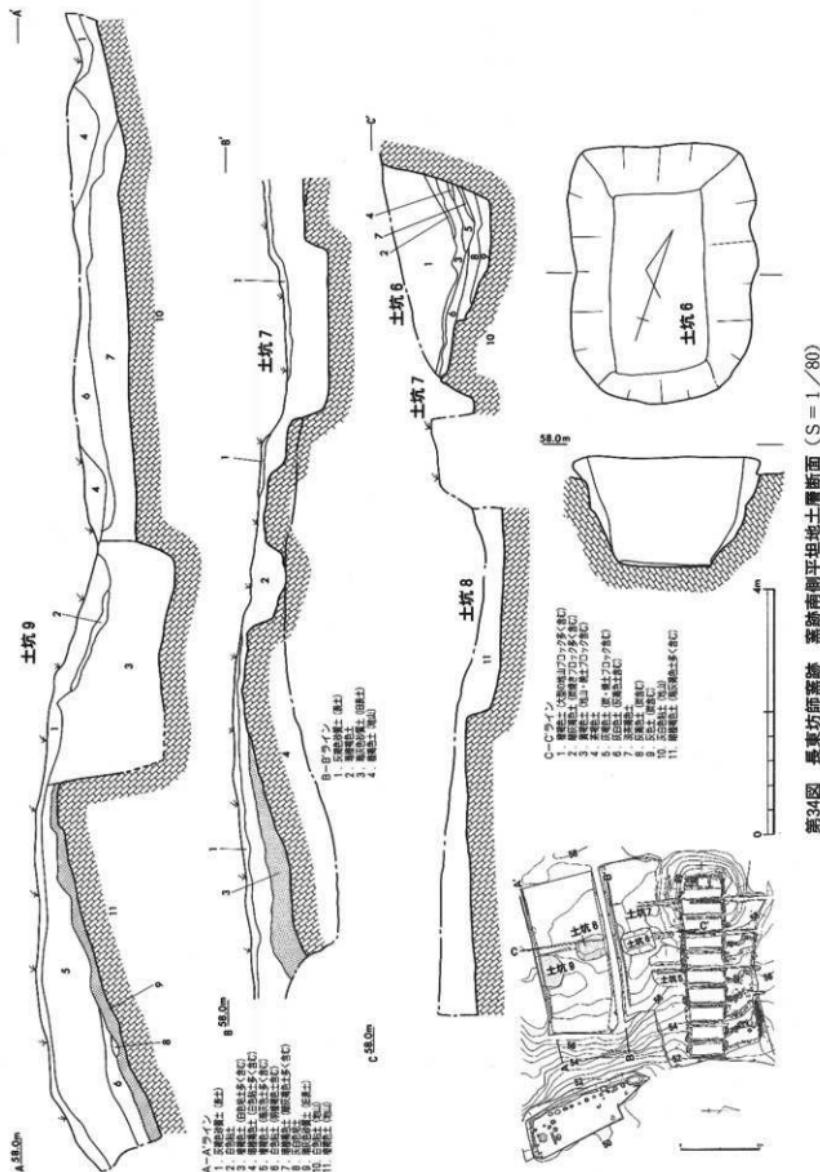
土坑 5 (第24図、写真図版36・37)

7・8番の南側に接する位置で検出した。土坑の上層には粘土・焼土・灰が、下層には多数のアゼが堆積していた。これらは登り窯を改修した際不要になったものを廃棄したものと推測される。

土坑 6～9 (第24・34図、写真図版48)

登り窯の南側で検出した十坑群は、それぞれの規模と配置から土窯し場跡と推測した¹¹。土坑7が「やまおけ」、土坑6・8は「ためおけ」と思われ、「水溜め」は土坑6・8間のベルト中に存在した可能性が高い。土坑6・8内では転落したと思われる製品が数点出土した。上坑群は調査時に性格が掴めず、粘土探掘坑の可能性を考えていた。このため、土坑7・9の調査は上面の規模を確認し、トレチで断面を実測するにとどめている。「オロ」は検出していないが、第34図B-B'ラインの土坑7東側には地山を掘り込んだ幅1m前後の窪みが存在し、これがオロの跡だった可能性

¹¹ 文獻8の「土窯し場の一例」を参考にした。登り窯との距離がかなり近いが鳩田春男氏より、事故の時水が近くにあった方が都合が良いからではないかとの教示を得ている。



第34図 長東坊師窯跡 煙肪南側平坦地土壠断面 ($S = 1/80$)

も考えられる。また、調査区外で確認した3基の土坑もこれらと同様の施設と考えられ、土坑9は別のセットの「ためおけ」と思われる。盛鉢棚の痕跡は確認できなかった。

第17表 長東坊師窯跡 土坑5~10計測表

番号	上面形 底面形	長軸(cm) 長軸(cm)	短軸(cm) 短軸(cm)	深さ(cm)	主 軸	出土遺物	備 考
5	不整長方形	400	230	102	N- 2° -W	アゼ	
	不整長方形	?	?				
6	長方形	410	300	176	N- 16° -W	陶器	「ためおけ」
	長方形	290	150				
7	?	220	80	89	?		「やまおけ」
	?	?	?				
8	長方形	360	300	112	N- 11° -W	陶器	「ためおけ」
	長方形	320	150				
9	不整長方形	400	270	190	N- 81° -E		「ためおけ」?
	不整長方形	?	?				
10	横円形	175	145	80	N- 54° -E		
	横円形	135	100				

4. 出土遺物（第35~46図、写真図版51~58）

長東坊師窯跡の物原は道路建設用地外の東斜面と西斜面にあり、今回は調査対象外だった。このため、ここでは窯の床・盛土内・登り窯周辺で出土した不良製品を扱うこととする。

丸物・その他の製品（第35~40図、写真図版51~57）

碗・鉢・壺・壺・瓶・鍋が出土した。皿類は建物跡でしか出土していないが、本遺跡の製品と思われる。また、製品は出土しなかったが取っ手部の型（160）が出土しているので、火鉢も生産していた可能性が高い。

登り窯の床面に残されていたのは鉢（28・30）、片口（37~39）のみで、調査区全体でもこの2器種が最も多く出土した。床面に残されていた製品はみな焼成が悪く、片口は並釉（透明釉）はツヤが無く白に近い色調である。盛土内（40・41）や周辺で採取したもの（42・43、44~47）と比較すると違いがよく分かる。このような不良製品が窯の中に残されていたのは、釉の不良の原因が温度が上がらなかったことによるもので、再度窯の中で焼成すれば透明になるためである¹²。

盛土内は最も多くの遺物が出土した個所である。ここで出土した製品は登り窯の増築以前に生産されたものなので、片口に関しては窯の床面に残されたものと時期による違いを検討できる。40は77と同じタイプの壺の中に溝載された状態で埋められていたもので、他の片口に比べ特に扁平な形状である。壺は口縁上面の釉を拭き取られており、やや古い要素を持っている¹³。

なお、主力製品である擂鉢・壺・壺の中には、工場名をスタンプしたものも生産されている。

瓦（第41~42図、写真図版57）

掘削前に登り窯周辺で表探した瓦はカマズヤに使用されたものと推測される。また、増築前の登り窯の土留めに使用されていた瓦は全て棧瓦だった。いずれも不良製品で瓦用の窯道具も出土しているが、丸物に比べて窯道具の数が極端に少なく、周辺の古い瓦窯で生産された可能性が高い。

12 嶋田春男氏の教示による。

13 同上。古い時期の壺は作業の便宜上口縁上面の釉を拭き取っていたが、消費者に不評で後には釉を拭き取らなくなつた。

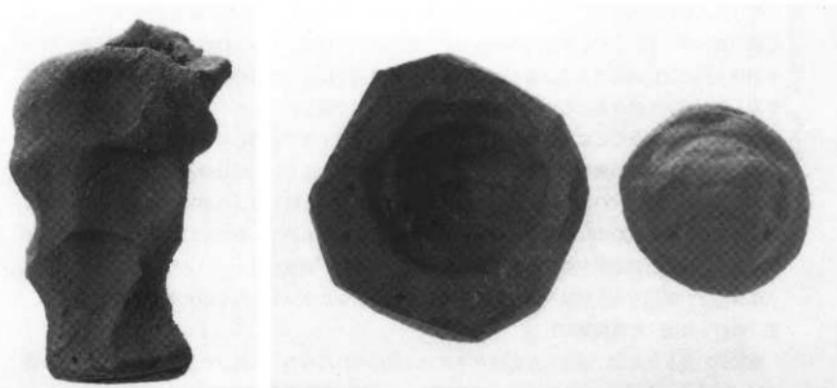
窯道具（第42～46図、写真図版57・58）

焼き台は丸物用と瓦用の両方が出土している⁰⁴。丸物用の焼き台は「ハリ」（128～142）と「ヌケ」（145～152）に大きく分けられる。ハリは重ね焼きの際に軸が熔着するのを防ぐために使用される。ヌケは壺を乗せるのに使用する円柱で、ハマに埋めて立てるので端部は尖らない。143は名称を確認できなかったがハマに直接設置し地積みに使用される。144は「チャツ」と呼ばれ、ヌケの上に乗せて高さを調節するに使用される⁰⁵。ほかに大型製品の重ね焼きに使用するハセドロも出土している（左下の写真）。153～158は瓦用の窯道具である。153は「モミツチ」と呼ばれ、モミの痕が明確で円形の窪みがある。154～158は「ハセ」と呼ばれ、瓦の間に挟んで熔着を防ぐのに使用される。盛土内で出土した瓦をみるとハセの使用状況がよく分かる（写真図版44）。また、モミツチはハセの頭を円形の窪みにはめて、瓦を窯に固定するのに使用される。

159は「カンモン」または「ゴ」と呼ばれ、ろくろの上盤にはめる軸受けである。これに対し建物の南側で出土したカンモ（18）は、ろくろの下盤の穴にはめて使用される。160は、飯田A遺跡の火鉢（61、写真図版26）を参考にして、取っ手穴部分の「型」であると判断した。後で穴を開けるところは窪むようにつくられている。161は「火ダテ」で、ツキスエの上に置いて地積みの製品の不良化を防ぐのに使用される。163・164は製品を焼き台から剥がすのに使用される。

その他の出土遺物（第46図、写真図版57・58）

このほか性格不明の板状鉄器（162）、かすがい（165）、磁器（166・167、写真図版58）が出土している。近代後半になると磁器の食器類と競合する製品はほとんど生産されなくなり、家庭用や個人的な依頼があった場合に僅かに焼いたようである⁰⁶。



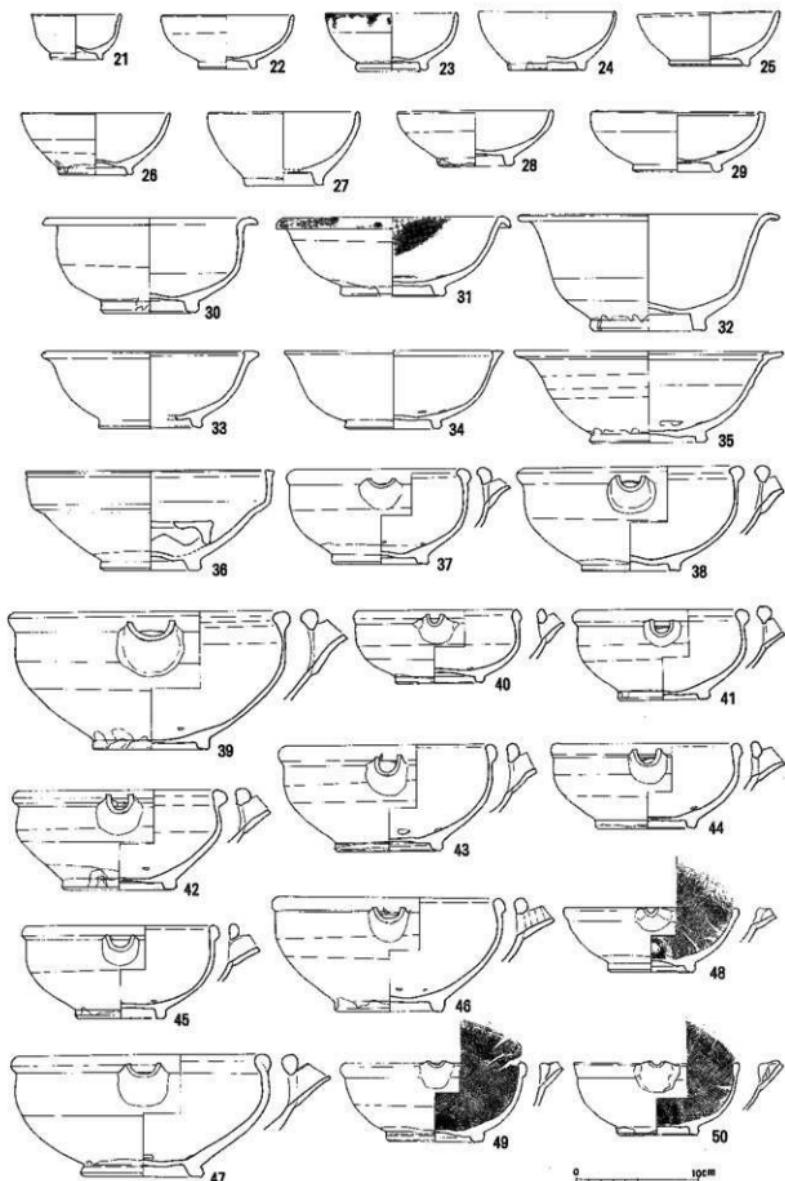
「ハセドロ」

160（左）と型抜きした粘土（右）

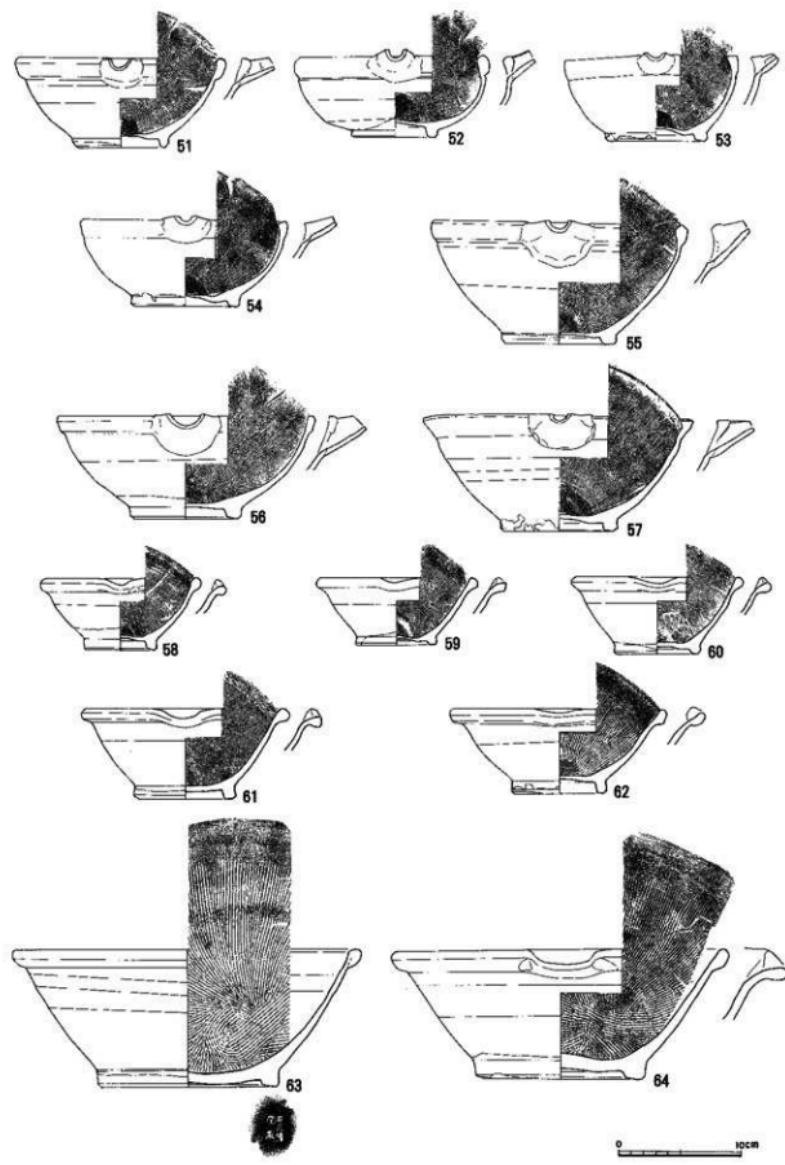
04 長東坊跡で出土した焼き台の名称や使用方法は基本的に文献8に従っている。

05 嶋田氏のご教示による。

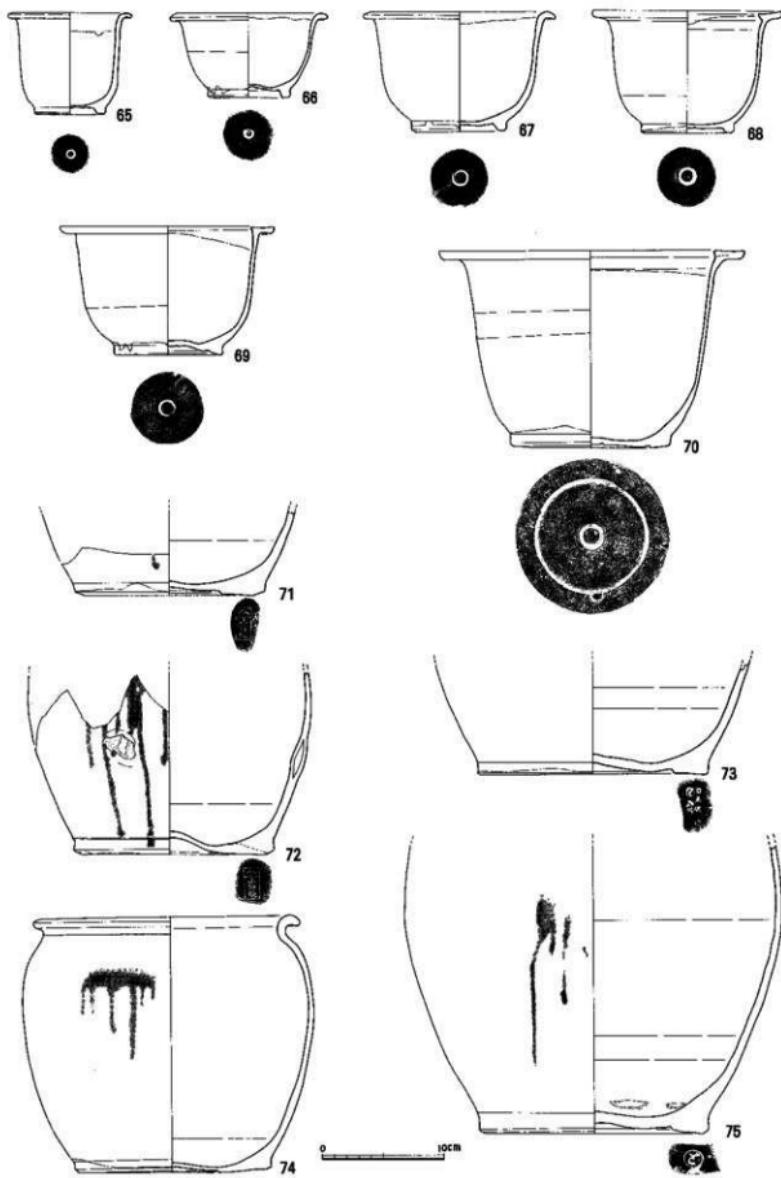
06 同上。



第35図 長東坊舗窯跡 出土遺物③ (S = 1/4)



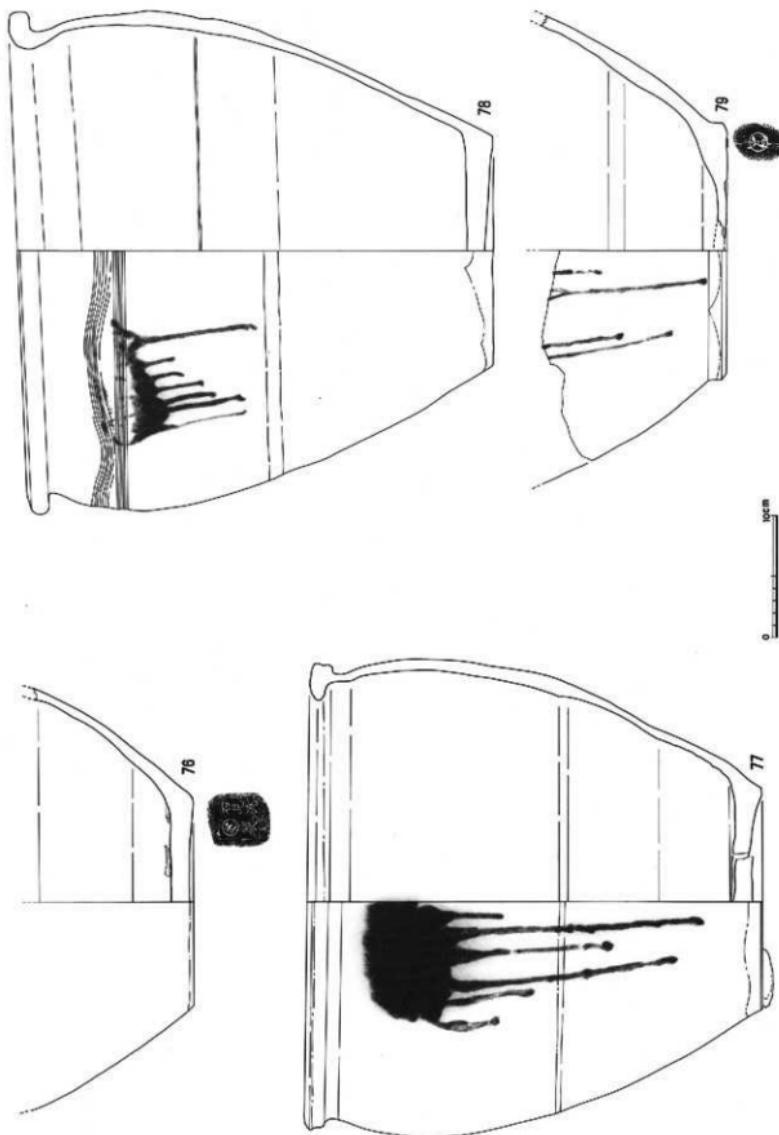
第36図 長東坊師窯跡 出土遺物④ (S = 1 / 4)

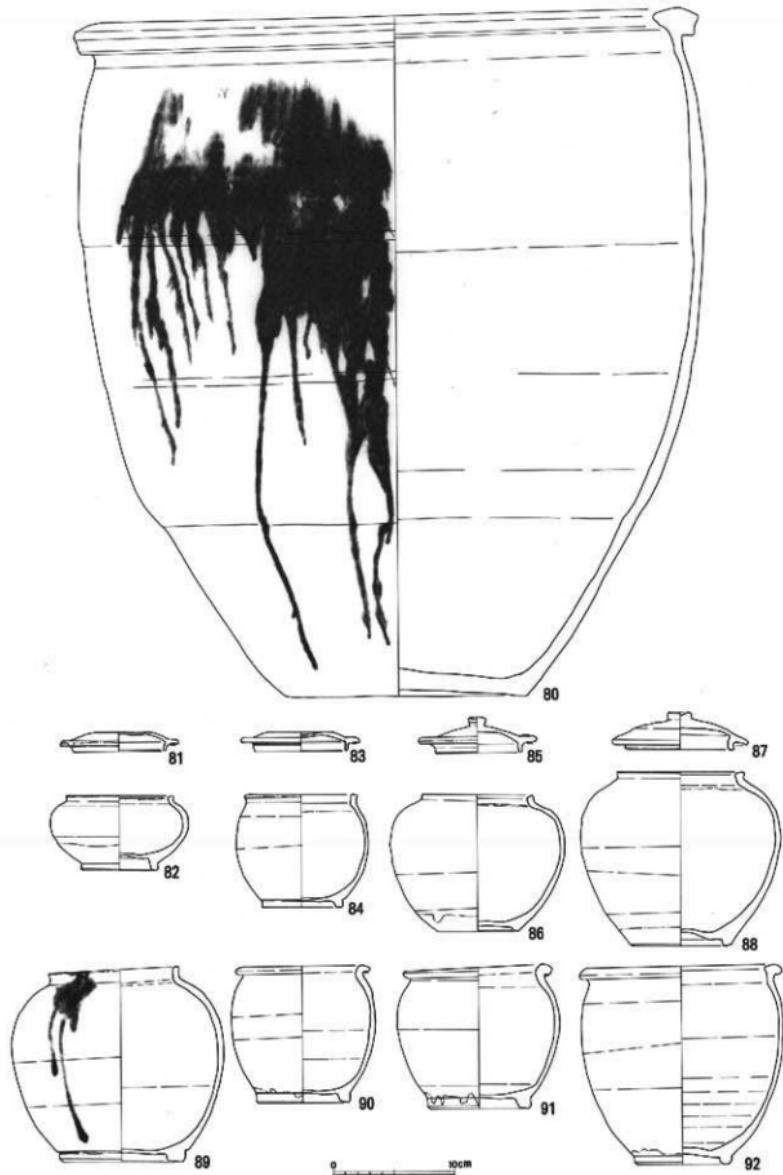


第37図 長東坊跡 出土遺物⑤ (S = 1 / 4)

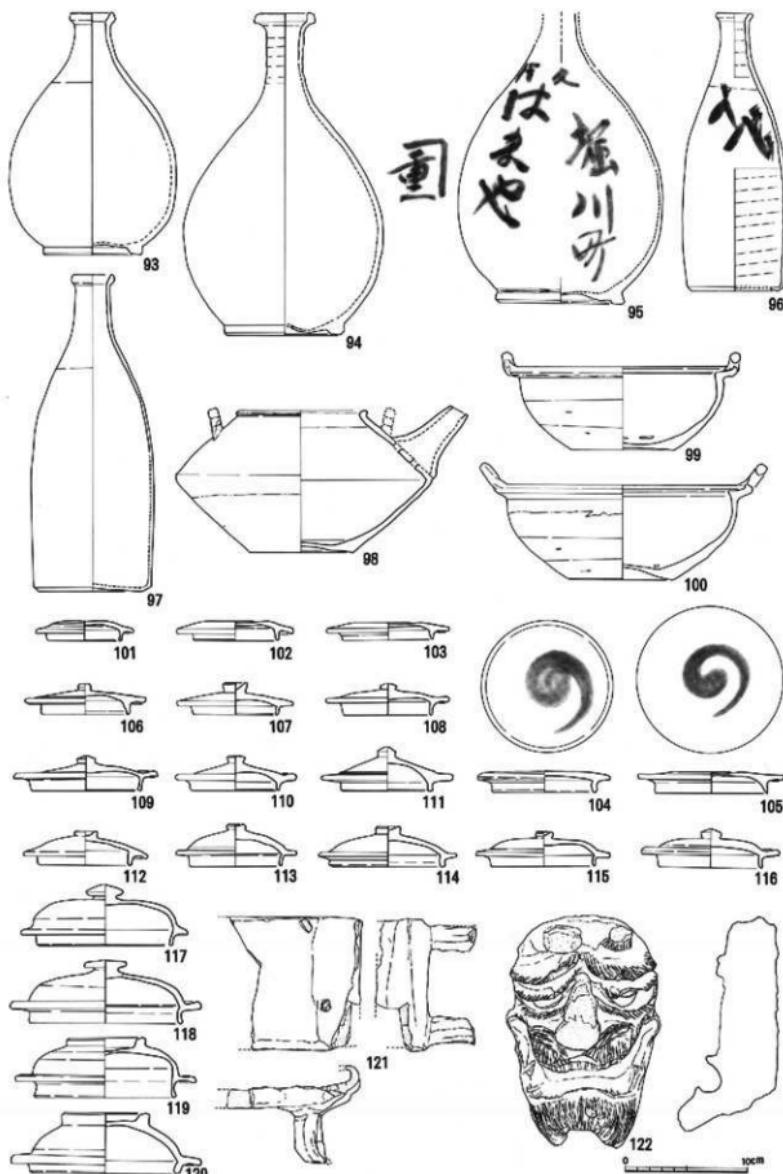
第38図 長東坊師窯跡 出土遺物⑥ (S = 1 / 4)

1/4

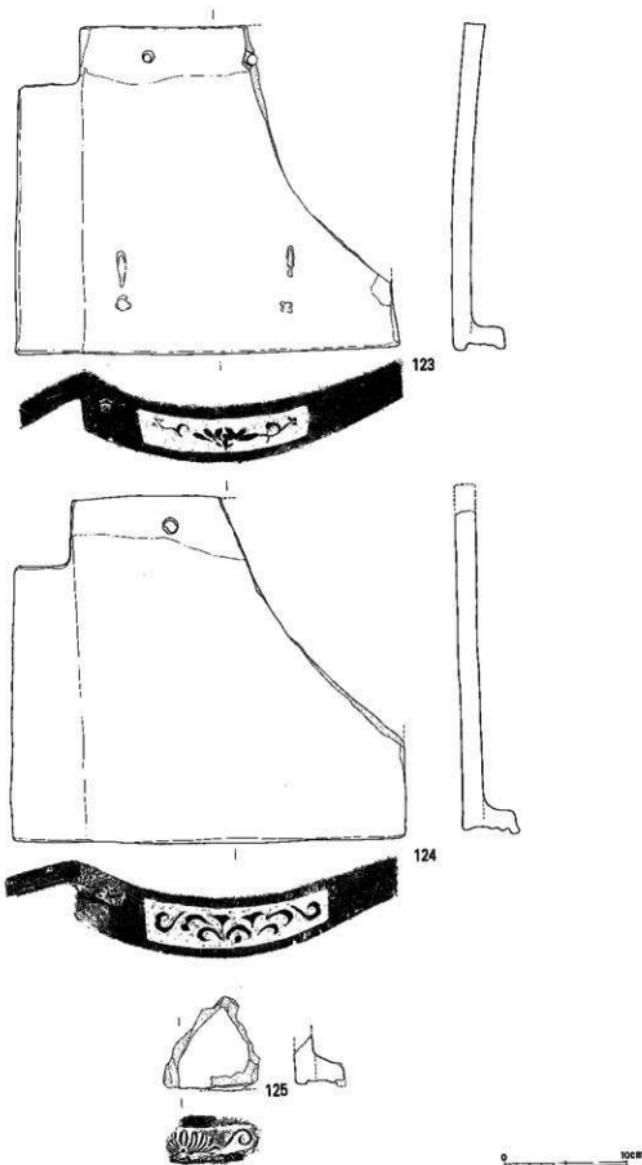




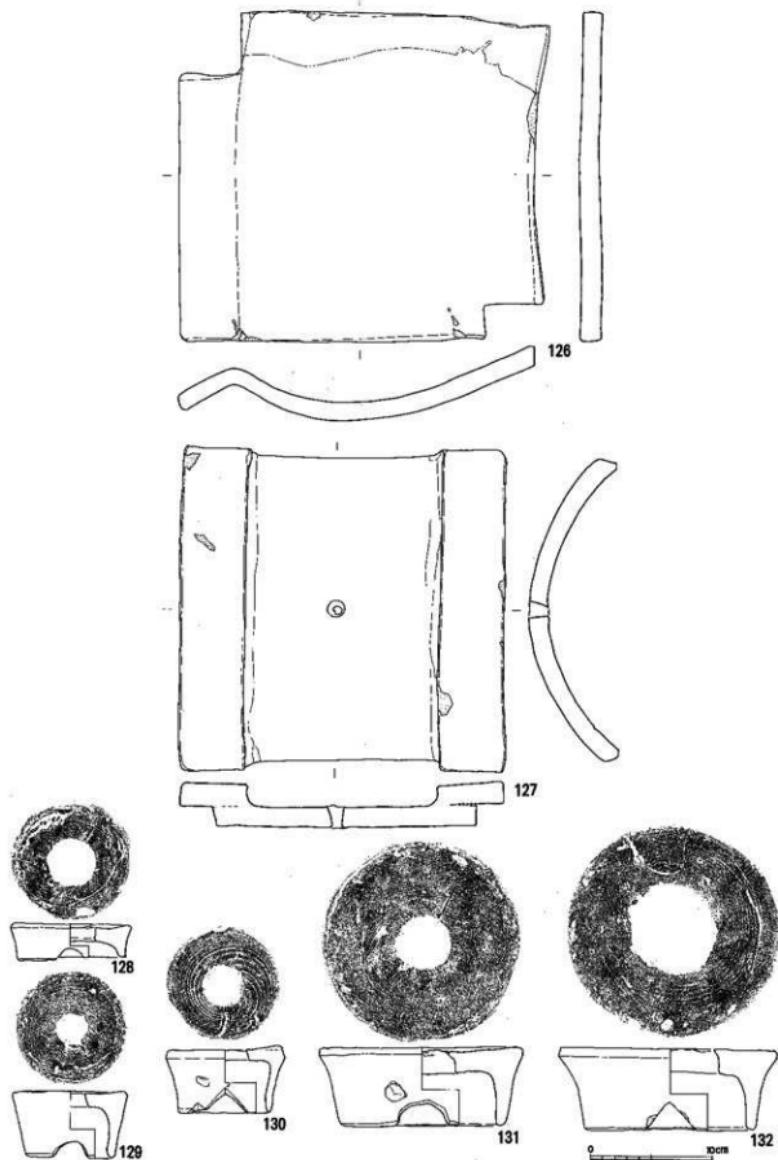
第39図 長東坊師窯跡 出土遺物⑦ (S = 1/4)



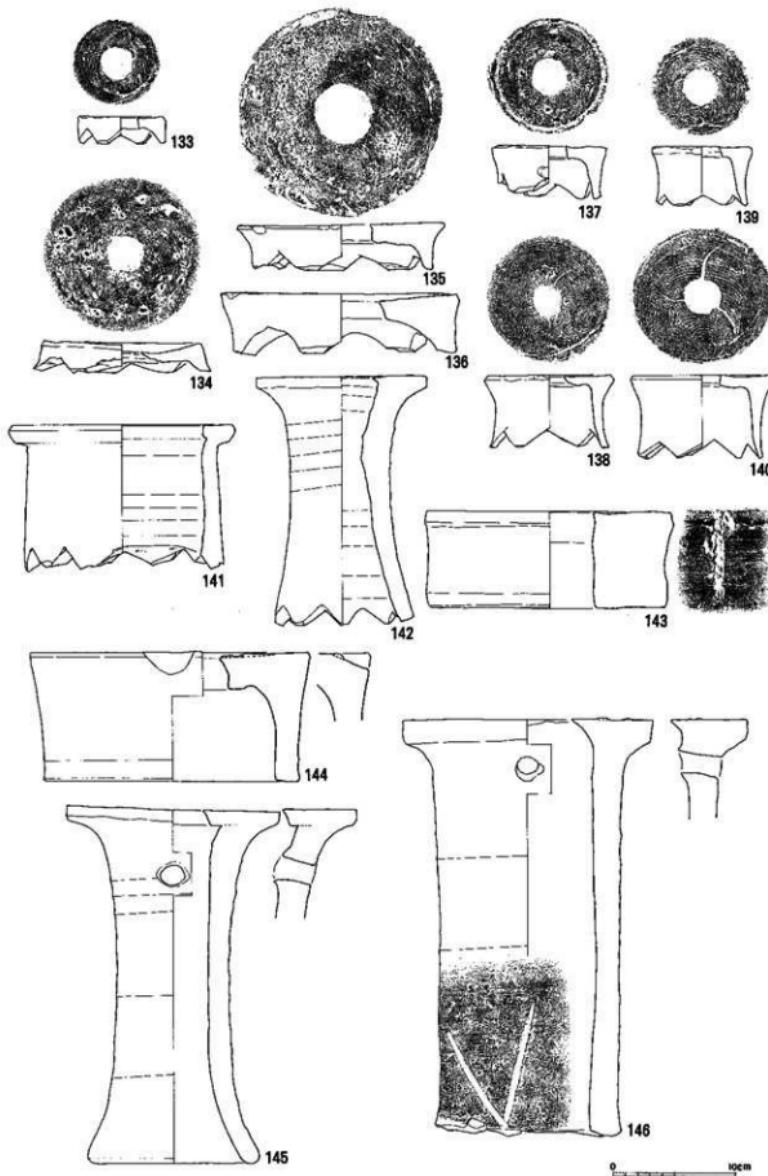
第40図 長東坊師窯跡 出土遺物⑧ (S = 1/4)



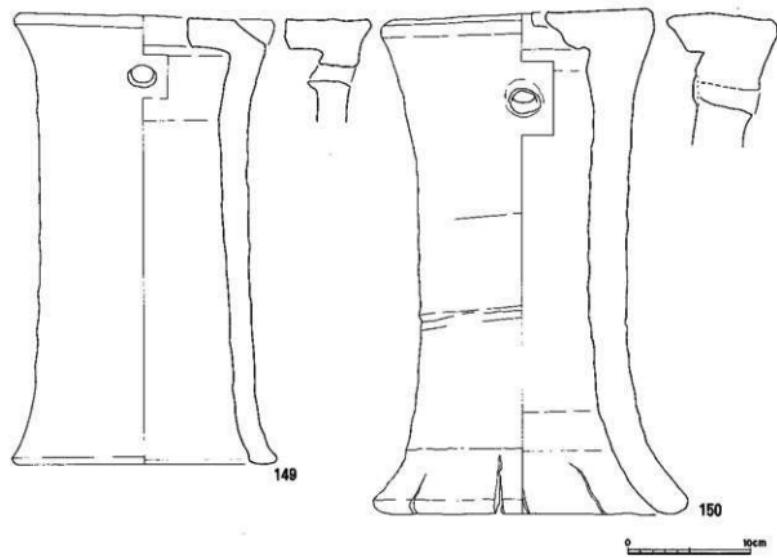
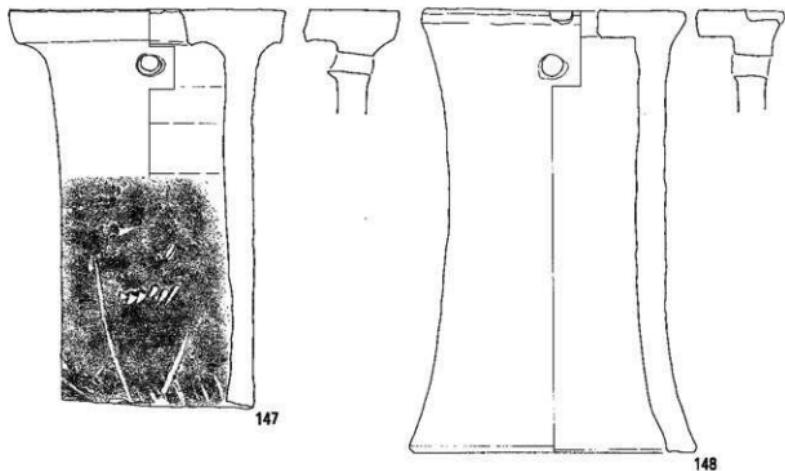
第41図 長東坊築跡 出土遺物⑨ ($S = 1/4$)



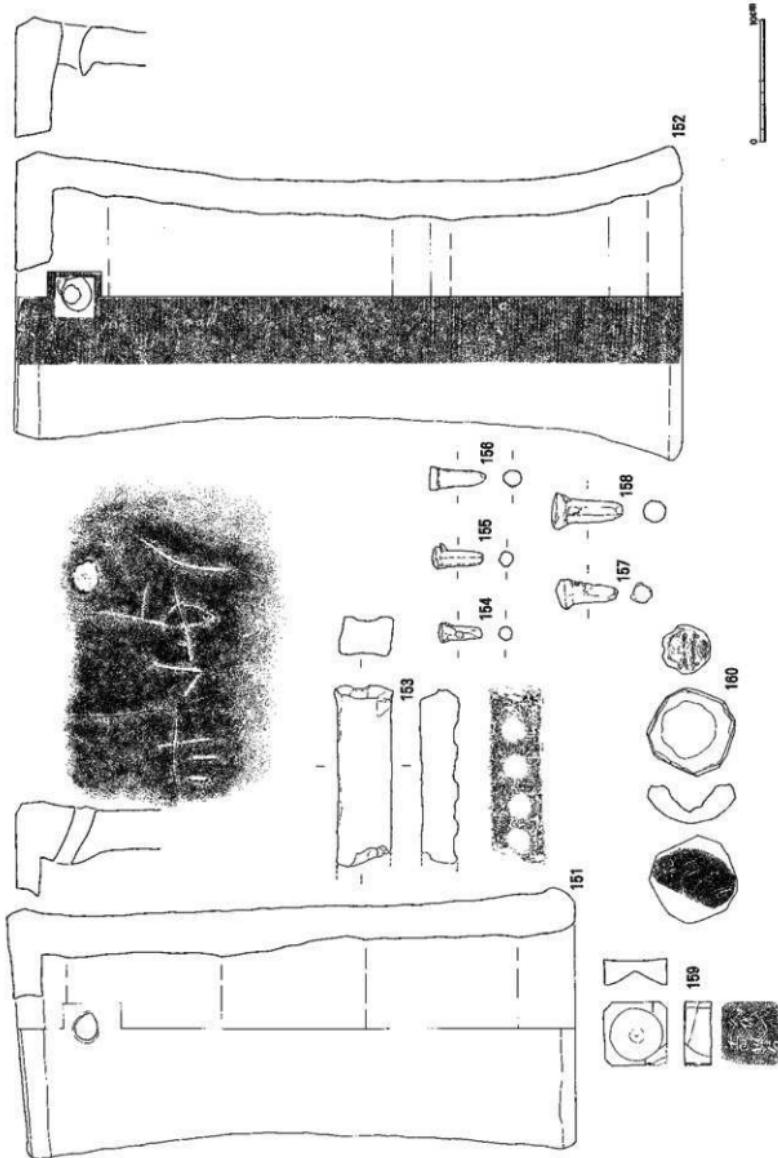
第42図 長東坊師窯跡 出土遺物⑩ (S = 1 / 4)



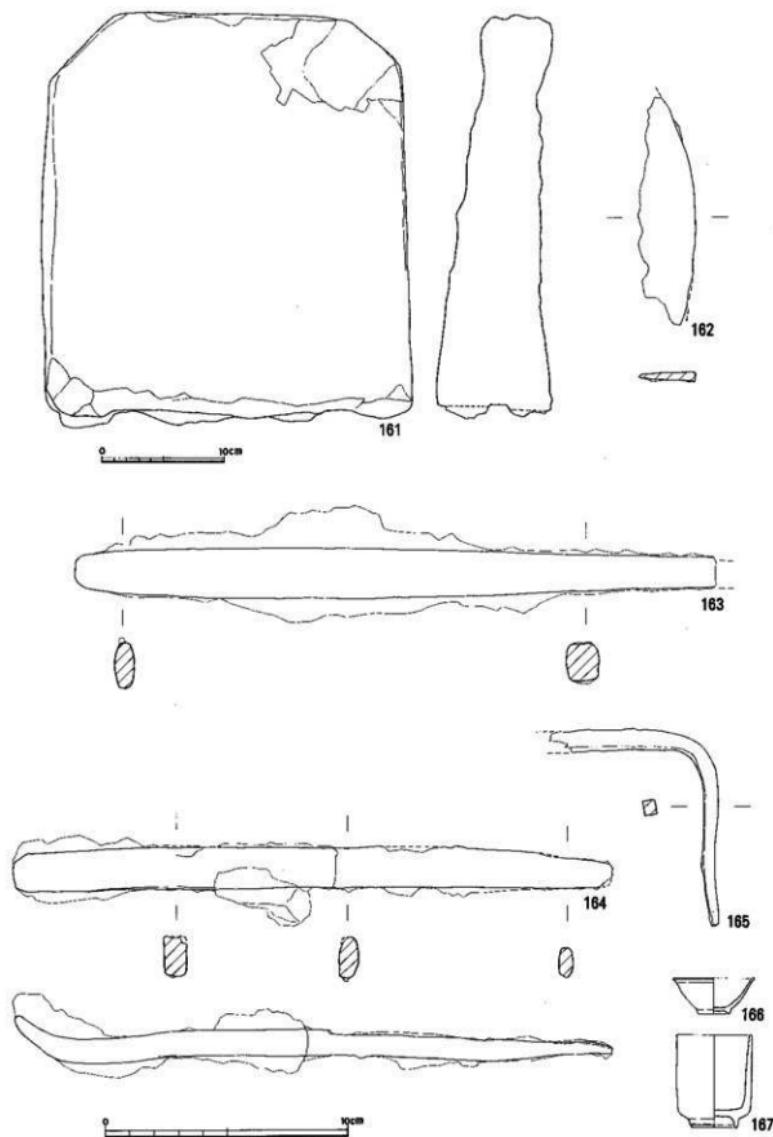
第43図 長東坊跡 出土遺物① (S = 1 / 4)



第44図 長東坊師窯跡 出土遺物② (S = 1 / 4)



第45圖 長東坊師窯跡 出土遺物⑬ (S=1 / 4)



第46図 長東坊跡 出土遺物② (161・166・167はS=1/4、162~165はS=1/2)

第18表 長東坊師窯跡 出土製品観察表

埠固 番号	写真 番号	実測 番号	種別	器種・形状	寸 法 (cm)					胎 土	施 葉	出土地点	備 考
					a	b	c	d	e				
35	51	21	陶器	小鉢	7.2	3.7	4.3	—	—	暗褐色	コバルト	南斜面	
35	51	22	陶器	中鉢	10.8	4.4	4.8	—	—	明灰褐色	未特徴	盛土内	
35	51	23	陶器	中鉢	10.6	4.8	6.0	—	—	淡茶褐色	未特徴	盛土内	口縁部に鉄物
35	51	24	陶器	中鉢	11.1	4.8	6.4	—	—	明褐色	未特徴	盛土内	
35	51	25	陶器	中鉢	11.4	4.4	6.6	—	—	茶褐色	未特徴	盛土内	
35	51	26	陶器	中鉢	12.0	5.0	6.2	—	—	明褐色	未特徴	盛土内	
35	51	27	陶器	中鉢	12.1	6.0	6.2	—	—	灰褐色	コバルト	盛土内	
35	51	28	陶器	小鉢	12.4	4.6	6.2	—	—	淡褐色	並輪	登り窓	
35	52	29	陶器	小鉢	12.8	5.0	7.3	—	—	淡褐色	並輪	南斜面	
35	52	30	陶器	中鉢	17.7	7.8	8.0	—	—	淡茶褐色	並輪	登り窓	
35	52	31	陶器	中鉢	18.0	6.8	8.2	—	—	淡褐色	並輪	南斜面	部分的に鉄物
35	52	32	陶器	中鉢	21.2	9.5	9.5	—	—	淡褐色	並輪	盛土内	
35	52	33	陶器	中鉢	17.8	6.3	8.4	—	—	淡褐色	並輪	建物南側	
35	52	34	陶器	中鉢	17.9	6.4	7.9	—	—	淡茶褐色	黒色物	盛土内	
35	52	35	陶器	中鉢	22.0	7.8	9.5	—	—	淡褐色	黒色物	盛土内	
35	52	36	陶器	中鉢	20.3	8.1	8.3	—	—	淡褐色	並輪	南斜面	内面に焦げ焼着
35	53	37	陶器	片口	15.0	7.9	7.9	16.6	—	黃褐色	並輪	登り窓	
35	53	38	陶器	片口	18.5	8.6	8.1	19.7	—	淡墨茶色	灰輪	登り窓	
35	53	39	陶器	片口	23.0	11.2	9.5	25.4	—	淡茶褐色	灰輪	登り窓	
35	53	40	陶器	片口	13.8	6.0	7.3	15.1	—	淡褐色	並輪	盛土内	
35	53	41	陶器	片口	14.4	7.5	7.6	15.6	—	淡灰褐色	並輪	盛土内	
35	53	42	陶器	片口	17.6	8.2	9.4	19.3	—	淡褐色	灰輪	盛土内	施輪時の指跡有り
35	53	43	陶器	片口	17.9	8.7	8.9	19.3	—	淡黃褐色	並輪	盛土内	
35	53	44	陶器	片口	15.6	7.0	8.2	17.5	—	黃褐色	並輪	南斜面	
35	53	45	陶器	片口	16.2	7.7	7.4	17.9	—	淡褐色	並輪	南斜面	
35	53	46	陶器	片口	19.0	9.5	9.0	21.2	—	淡褐色	並輪	南斜面	
35	53	47	陶器	片口	21.2	10.2	10.1	23.8	—	淡黃褐色	並輪	南斜面	
35	53	48	陶器	蓋鉢(切片口形)	14.3	5.3	7.2	15.2	—	淡墨褐色	未特徴	盛土内	
35	53	49	陶器	蓋鉢(切片口形)	15.2	6.5	15.2	18.4	—	淡茶褐色	未特徴	盛土内	
35	53	50	陶器	蓋鉢(切片口形)	13.5	8.0	8.7	14.8	—	墨茶色	未特徴	盛土内	
36	53	51	陶器	蓋鉢(切片口形)	17.2	7.4	7.9	19.2	—	淡茶褐色	未特徴	盛土内	
36	53	52	陶器	蓋鉢(切片口形)	15.9	6.7	7.0	17.7	—	暗茶褐色	未特徴	盛土内	
36	53	53	陶器	蓋鉢(切片口形)	14.1	7.0	8.2	15.5	—	暗褐色	未特徴	盛土内	
36	53	54	陶器	蓋鉢(切片口形)	17.0	7.2	8.9	18.9	—	暗褐色	未特徴	盛土内	
36	53	55	陶器	蓋鉢(切片口形)	20.8	10.1	9.4	23.0	—	墨茶色	未特徴	盛土内	
36	53	56	陶器	蓋鉢(切片口形)	21.1	8.4	9.1	23.5	—	淡褐色	未特徴	登り窓北側	
36	53	57	陶器	蓋鉢(切片口形)	22.0	9.5	9.5	24.0	—	淡褐色	未特徴	盛土内	
36	53	58	陶器	蓋鉢	13.1	5.9	6.0	—	—	淡茶褐色	未特徴	盛土内	
36	53	59	陶器	蓋鉢	13.1	5.5	6.7	—	—	淡茶褐色	未特徴	盛土内	
36	53	60	陶器	板鉢	14.0	6.2	7.1	—	—	暗茶褐色	未特徴	盛土内	
36	53	61	陶器	板鉢	17.0	6.4	6.4	—	—	暗茶褐色	未特徴	盛土内	
36	53	62	陶器	板鉢	17.7	7.0	7.7	—	—	灰褐色	未特徴	盛土内	
36	53	63	陶器	板鉢	28.5	11.2	14.7	—	—	淡褐色	未特徴	盛土内	
36	53	64	陶器	板鉢	27.5	10.7	13.9	—	—	黃褐色	未特徴	盛土内	
37	54	65	陶器	板木鉢	10.2	8.3	8.9	—	—	淡茶褐色	並輪	盛土内	
37	54	66	陶器	板木鉢	13.0	6.9	6.8	—	—	明灰褐色	並輪	建物南側	
37	54	67	陶器	板木鉢	15.8	9.8	7.8	—	—	黃褐色	並輪	盛土内	
37	54	68	陶器	板木鉢	15.5	10.0	7.1	—	—	淡褐色	並輪	盛土内	
37	54	69	陶器	板木鉢	17.8	10.5	8.8	—	—	明褐色	並輪	盛土内	
37	54	70	陶器	板木鉢	25.0	16.1	13.1	—	—	灰色	未特徴	盛土内	
37	55	71	陶器	中鉢	?	?	15.5	?	—	暗褐色	未特徴	盛土内	頭部に「直し」底部に葉印
37	-	72	陶器	中鉢	?	?	16.4	?	—	暗褐色	未特徴	盛土内	
37	55	73	陶器	中鉢	?	?	18.8	?	—	暗褐色	未特徴	盛土内	底部に葉印
37	54	74	陶器	中鉢	21.8	21.2	16.0	23.7	—	淡茶褐色	未特徴	登り窓南側	
37	55	75	陶器	中鉢	?	?	18.6	30.7	—	暗褐色	未特徴	盛土内	頭部に「直し」底部に葉印
38	55	76	陶器	中鉢	?	?	18.6	?	—	灰色	未特徴	盛土内	頭部に葉印
38	54	77	陶器	中鉢	38.2	37.4	17.4	39.0	—	灰褐色	未特徴	盛土内	頭部に「直し」
38	54	78	陶器	中鉢	41.0	39.5	18.8	40.8	—	明灰褐色	未特徴	6番作糞場	頭部に「直し」
38	-	79	陶器	大鉢	?	?	21.0	?	—	暗灰色	未特徴	盛土内	頭部に「直し」底部に葉印
39	54	80	陶器	大鉢	51.0	56.2	19.6	51.2	—	明灰褐色	未特徴	建物	頭部に「直し」
39	55	81	陶器	蓋	9.7	1.6	—	7.5	—	暗茶褐色	黒色物	盛土内	
39	55	82	陶器	小壹	8.7	6.1	8.2	11.3	—	明褐色	黒色物	登り窓南側	
39	55	83	陶器	蓋	9.7	1.0	—	7.6	—	明褐色	並輪	盛土内	
39	55	84	陶器	小壹	9.2	9.2	8.1	10.7	—	暗褐色	並輪	盛土内	
39	55	85	陶器	蓋	9.7	2.9	1.5	7.0	—	淡茶褐色	並輪	盛土内	
39	55	86	陶器	小壹	9.0	11.2	6.5	14.3	—	淡褐色	並輪	盛土内	
39	55	87	陶器	蓋	11.0	3.1	1.9	8.9	—	淡褐色	並輪	盛土内	
39	55	88	陶器	中壹	10.4	14.3	8.3	15.3	—	安褐色	並輪	盛土内	
39	55	89	陶器	中壹	10.6	16.0	10.2	17.3	—	灰色	並輪	盛土内	頭部に「直し」
39	55	90	陶器	小壹	10.9	11.2	7.6	11.7	—	淡墨茶褐色	未特徴	盛土内	
39	55	91	陶器	小壹	12.1	11.8	8.5	13.2	—	茶褐色	未特徴	盛土内	
39	55	92	陶器	中壹	16.4	16.3	8.0	16.5	—	淡黃褐色	未特徴	盛土内	

第19表 長東坊師窯跡 出土製品観察表

拂団 番号	写真 図版	遺物 番号	種別	器種・形状	寸 法 (cm)					胎 土	釉 菓	出土地点	備 考
					a	b	c	d	e				
40	55	93	陶器	中瓶	3.7	19.9	8.1	—	—	明褐色	並輪	盛土内	
40	55	94	陶器	大瓶	4.7	26.4	9.7	—	—	淡褐色	並輪	盛土内	
40	55	95	陶器	大瓶	?	?	10.6	—	—	灰色	並輪	南斜面	奥須で地名・墨等を捺付
40	55	96	陶器	網底利	2.9	22.7	7.0	—	—	淡黃褐色	並輪	南斜面	鉄錆
40	55	97	陶器	網底利	3.5	25.9	8.5	—	—	明褐色	並輪	盛土内	
40	56	98	陶器	土瓶	10.6	11.5	8.5	20.9	—	明褐色	並輪	盛土内	
40	56	99	陶器	土瓶	18.5	8.0	8.4	(19.4)	—	明茶褐色	未特輪	南斜面	
40	56	100	陶器	土瓶	21.2	9.6	8.1	23.4	—	灰褐色	未特輪	南斜面	
40	56	101	陶器	蓋	8.0	1.6	—	6.0	—	淡褐色	黑色輪	盛土内	
40	56	102	陶器	蓋	9.7	1.6	—	6.9	—	淡茶褐色	並輪	盛土内	
40	56	103	陶器	蓋	10.1	1.5	—	7.4	—	淡褐色	褐色	建物南側	
40	56	104	陶器	蓋	10.9	1.8	—	8.3	—	灰褐色	灰輪	盛土内	上面に一つ巴の呂須絵
40	56	105	陶器	蓋	12.0	1.7	—	9.0	—	灰褐色	灰輪	盛土内	上面に一つ巴の呂須絵
40	56	106	陶器	蓋	9.8	2.5	1.0	7.0	—	明褐色	並輪	盛土内	
40	56	107	陶器	蓋	9.5	2.6	2.1	7.0	—	淡黃褐色	並輪	建物南側	
40	56	108	陶器	蓋	10.1	2.6	1.4	7.1	—	淡褐色	灰輪	盛土内	
40	56	109	陶器	蓋	11.7	2.9	1.5	9.0	—	灰色	並輪	盛土内	
40	56	110	陶器	蓋	9.9	2.8	1.5	7.2	—	淡褐色	並輪	盛土内	
40	56	111	陶器	蓋	10.8	3.6	1.5	7.5	—	淡褐色	並輪	盛土内	
40	56	112	陶器	蓋	10.1	2.8	1.9	7.2	—	反褐色	並輪	盛土内	
40	56	113	陶器	蓋	9.9	3.4	1.6	7.4	—	淡黃色	並輪	盛土内	
40	56	114	陶器	蓋	11.3	3.3	2.1	9.5	—	明黃褐色	並輪	建物南側	
40	56	115	陶器	蓋	10.9	2.9	1.4	8.5	—	淡黃褐色	並輪	盛土内	
40	56	116	陶器	蓋	11.4	3.2	1.5	8.4	—	明褐色	並輪	盛土内	
40	56	117	陶器	蓋	13.7	5.0	3.0	10.8	—	明茶褐色	未特輪	盛土内	
40	56	118	陶器	蓋	15.6	5.1	3.4	12.2	—	淡茶褐色	未特輪	盛土内	
40	56	119	陶器	蓋	(14.7)	4.9	6.4	(11.1)	—	灰色	並輪	建物南側	
40	56	120	陶器	蓋	15.6	5.0	7.2	11.6	—	淡黃褐色	黑色輪	盛土内	
40	57	121	陶器	板	?	8.0	11.0	—	—	淡黃褐色	黑色輪	盛土内	仏具?
40	57	122	陶器	面	12.6	19.0	8.2	—	—	灰色	—	3番作業場「般若」	

第20表 長東坊師窯跡 出土瓦観察表

拂団 番号	写真 図版	遺物 番号	種別	器種・形状	寸 法 (cm)					胎 土	釉 菓	文 標	出土地点	備 考		
					a	b	c	d	e							
41	57	123	瓦	軒棟瓦	26.7	1.5	3.1	31.5	13.8	5.5	灰褐色	未特輪	唐草文・墨号	窯跡南側		
41	57	124	瓦	軒棟瓦	26.5	1.6	3.1	32.1	15.0	5.8	暗褐色	未特輪	唐草文	窯跡南側		
41	57	125	瓦	軒棟瓦	?	?	?	?	?	?	淡灰褐色	未特輪	唐草文	盛土内		
42	57	126	瓦	瓦	27.0	1.6	3.6	33.5	—	—	黑褐色	未特輪	盛土内	盛り窯		
42	57	127	瓦	瓦	26.8	3.5	7.5	26.7	15.5	1.7	1.6	明褐色	未特輪	盛り窯	組付き?	

第21表 長東坊師窯跡 窯道具観察表

拂団 番号	写真 図版	遺物 番号	種別	器種・形状	寸 法 (cm)					胎 土	釉 菓	出土地点	備 考	
					a	b	c	d	e					
42	57	128	窯道具	ハリ	9.3	3.1	4.0	—	—	淡褐色	—	盛土内		
42	57	129	窯道具	ハリ	9.0	5.4	3.2	—	—	反褐色	—	盛土内		
42	57	130	窯道具	ハリ	9.1	5.5	4.0	—	—	淡褐色	—	盛土内		
42	57	131	窯道具	ハリ	16.0	6.5	5.0	—	—	淡茶褐色	—	盛り窯		
42	57	132	窯道具	ハリ	17.5	7.0	7.8	—	—	暗褐色	—	盛土内	指記号有り	
43	57	133	窯道具	ハリ	7.0	2.2	2.6	—	—	茶褐色	—	盛り窯		
43	57	134	窯道具	ハリ	12.6	2.5	3.0	—	—	茶褐色	—	盛り窯		
43	57	135	窯道具	ハリ	17.0	3.9	4.8	—	—	暗茶褐色	—	盛り窯	指記号有り	
43	57	136	窯道具	ハリ	19.4	5.1	7.8	—	—	暗褐色	—	盛土内	指記号有り	
43	57	137	窯道具	ハリ	9.3	4.3	3.5	—	—	暗茶褐色	—	盛土内	指記号有り	
43	57	138	窯道具	ハリ	10.0	5.6	2.6	—	—	淡茶褐色	—	盛り窯		
43	57	139	窯道具	ハリ	8.0	4.8	3.0	—	—	高茶褐色	—	盛土内	指記号有り	
43	57	140	窯道具	ハリ	10.6	6.8	3.0	—	—	暗茶褐色	—	盛り窯		
43	57	141	窯道具	ハリ	17.8	17.0	13.3	—	—	淡黑茶褐色	—	盛り窯		
43	57	142	窯道具	ハリ	14.0	20.3	11.4	8.2	3.2	暗反褐色	—	盛り窯		
43	57	143	窯道具	コスケ	20.1	7.9	7.3	—	—	淡茶褐色	—	盛り窯	網部縫に溝	
43	57	144	窯道具	チャツ	22.8	10.5	9.5	—	—	茶褐色	—	盛り窯		
43	57	145	窯道具	ヌケ	17.4	29.3	14.0	9.2	2.0	淡赤茶色	—	盛り窯		
43	57	146	窯道具	ヌケ	20.4	34.0	15.2	14.6	2.3	淡黃褐色	—	盛り窯	「X」印の線刻	
44	57	147	窯道具	ヌケ	22.5	32.5	15.5	15.5	2.4	赤茶色	—	盛り窯	「X」印の線刻 ヘラ跡	
44	57	148	窯道具	ヌケ	21.6	36.4	23.4	17.8	2.0	赤茶色	—	盛り窯		

第22表 長東坊跡窯道具・その他の遺物観察表

件名 番号	写真 図版 番号	遺物 種類	種別	基盤・形状	寸法(cm)					胎土	釉薬	出土地点	備考
					a	b	c	d	e				
44 58 149	窯道具	スケ		21.4 37.0 21.6 17.2 2.2						赤茶色	—	登り窯	
44 58 150	窯道具	スケ		22.2 40.8 25.6 16.8 2.4						黄褐色	—	登り窯	
45 58 151	窯道具	スケ		20.0 46.6 19.6 18.6 2.4						淡黄褐色	—	登り窯	底部に練刻文字?
45 58 152	窯道具	スケ		22.0 54.5 23.0 18.0 3.0						黄褐色	—	登り窯	表にナデ跡
45 58 153	窯道具	モミツチ		4.7 3.1 — — —						明褐色	—	登り窯	瓦用
45 58 154	窯道具	ハセ		1.6 3.5 — — —						茶褐色	—	登り窯	瓦用
45 58 155	窯道具	ハセ		1.8 4.1 — — —						茶褐色	—	南斜面	瓦用
45 58 156	窯道具	ハセ		1.9 4.6 — — —						黄褐色	—	登り窯	瓦用
45 58 157	窯道具	ハセ		2.3 5.1 — — —						茶褐色	—	登り窯	瓦用
45 58 158	窯道具	ハセ		3.1 5.8 — — —						淡黄褐色	—	登り窯	瓦用
45 58 159	窯道具	カンモン		5.2 2.1 5.1 4.3 1.1						灰色	—	窯跡西側	ろくろ部品 底部に練刻文字
45 58 160	窯道具	外型		7.2 3.1 6.5 4.4 2.1						黄灰色	—	盛土内	歌面 底部に練刻文字
46 58 161	窯道具	火ダテ		30.0 32.3 9.1 — —						赤茶色	—	登り窯	
46 58 162	鉄器	ハサミ?		? ? ? — —						—	—	盛土内	
46 58 163	鉄器	ハリ起こし		? 1.3 1.3 — —						—	—	黒跡西側	
46 58 164	鉄器	ハリ起こし		24.5 1.7 0.9 — —						—	—	黒跡南側	
46 58 165	鉄器	盤		? ? ? — —						—	—	盛土内	
46 58 166	磁器	小瓶		6.5 2.9 2.2 — —						白色	透明釉	盛土内	
46 58 167	磁器	小瓶		6.0 7.6 4.0 — —						白色	透明釉	盛土内	

第3節 小 結

1. 造構について

今回の調査では物原の発掘は行わなかったが、登り窯・建物跡・土漉し場という窯場を構成する各施設の調査を行うことができた。

石見焼の登り窯は山の斜面を利用して築かれるのが一般的だが、本遺跡の登り窯は後部を丘陵尾根上に盛土して構築した珍しい例だった。さらに、最上段に位置するふかせの背後に煙道を設け直接裏山に排出するものが多いが、本遺跡の登り窯は増築後に煙突を設置していたと推測される。この様に石見焼の登り窯に煙突が設置されるのは比較的新しい時期のこととされ、窯場が住宅地の近くに造られるようになり公害が問題視されてからのこととされる(文献23)。このことから、煙突の設置は窯の操業期間を推測する材料の一つになると考えられる。また、後部2室が3.5寸勾配、それ以外が4~5寸勾配と、一般的の丸物窯より一寸前後急な勾配である。この勾配は瓦窯に近く、盛土内で不良製品の棧瓦が多数出土している点からも、瓦窯を丸物窯に造り変えた可能性が考えられる。ただし、調査区内で瓦用の窯道具がほとんど出土しなかったので、詳細は不明である。

登り窯南東の平坦地で検出した建物は道路建設用地の関係で部分的にしか調査できなかったが、床面の状況、柱の配置、壁際の土坑等から、基本的には文献8・24に記述された「職場」の建物と同様の構造であったと考えられる。土漉し場は調査時に性格を掴めなかった為、全容を明らかにしきれていない。調査前に尾根上で確認した平坦地は調査区よりさらに南に20m以上続いており、調査区内で検出されなかった盛鉢棚やその他の施設が存在した可能性がある。

2. 出土遺物について

物原が道路建設用地の外にあったので、本遺跡で生産された器種の全容を知ることはできなかった。しかし、本遺跡で生産された丸物は、周辺の窯跡で出土・採集された大正以降の製品と形態・軸の特徴が酷似している。注記を確認しなければ調査担当者でも区別できない程で、このことは大正以降の石見焼を調査・研究する上で特に重要なと思われる。また、19世紀に操業していたと考えられる窯の資料と比較すると、生産器種が減り、各器種の中でのバリエーションが増えている。近世

の製品に比べて来待軸は光沢が増してやや明るい茶色になり、並軸は透明度が増す。

飯田A遺跡の資料と比較して新たに加わった製品に、切片口形の擂鉢（48～57）がある。現在のところ周辺の近世遺跡でこの形の擂鉢は確認されていない。大田屋窯跡でも生産されており、江津・浜田では近代以降に現れるようである。また、甕は全て頸部が短く安定感のあるプロポーションになり、78のように口縁内面が突出しないものも作られる。

3. 操業時期について

聞き取りでは窯場の操業時期を特定できなかった。このため、検出した遺構・遺物からおよその操業期間を推測してみた。まず、遺構では登り窯が比較的大型で、傾斜が緩い点が注目される。大正中期を境に大型化・緩傾斜化の傾向を見せる江津市の状況（文献25）を参考にすると、操業が終了したのは早くても大正以降と考えられる。窯の増築の際に煙突が設置されている点もこれと合致する。開始時期については遺構からは判断できなかった。

次に遺物からの推定だが、時期が最も古いものは建物の周辺で出土した近世後半の遺物である。これらは数が少ないと、出土した製品に近世後半頃に操業していた窯の資料と似たものが確認できなかったので、開始時期がこの頃まで遡る可能性は低いと思われる。このほか出土遺物では盛土内で出土した「石見焼」・「上府焼」のスタンプを押した製品も手掛かりになると思われる。石見焼の名称が意識して使用されるようになるのは、明治36年（1903）の石見焼陶器製造業組合設立以降のことである⁷⁷、これらが盛土内から出土していることから、大正以降まで操業が続いていた可能性が高い。また、出土した磁器はいずれも近代以降のものだった。

以上の状況から本遺跡の操業開始時期は特定できなかったが、組合設立以前の時期に瓦の生産を行った可能性があり、大正時代を前後する時期に丸物の生産を行っていたと推測される。



長東坊師窯跡盛土内出土遺物擂鉢

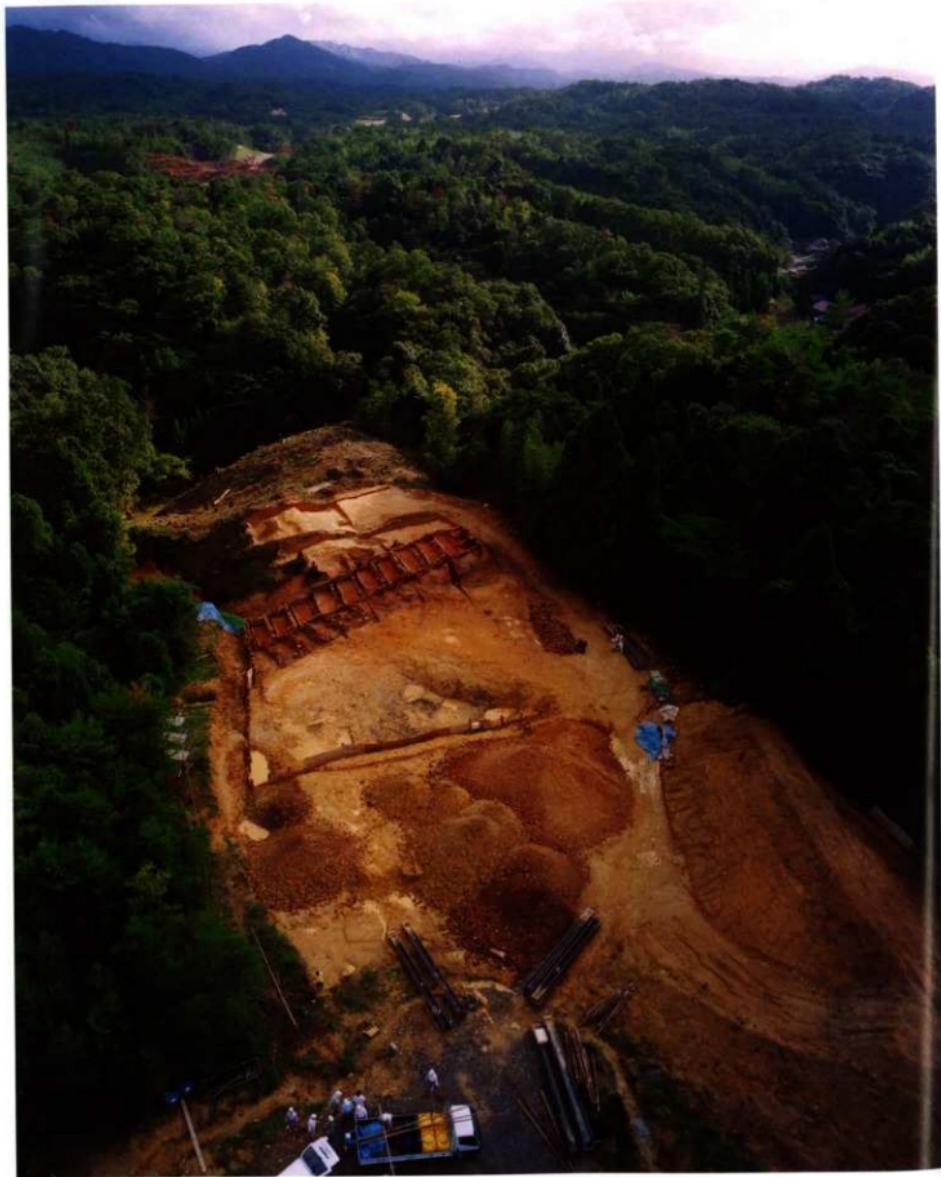
⁷⁷ 鳥田氏のご教示による。



長東坊師窯跡 調査前遠景（南東から）



長東坊師窯跡 調査後遠景（南東から）



長東坊師窯跡 調査後全景（北から）



長東坊師窯跡 登り窯北側検出時（北東から）



長東坊師窯跡 登り窯断面（北東から）



長東坊御霊舎 登り新開塗風景（北東から）



長東坊師窯跡 登り窯（東から）



長東坊師窯跡 9番火格子（東から）



長東坊師窯跡 煙突部（東から）



長東坊師窯跡 ふかせ・付属房（北から）



長東坊師窯跡 7番北側検出時（北から）



長東坊師窯跡 7・8番床面検出時（北から）



長東坊師窯跡 7・8・9番断面（北から）



長東坊師窯跡 9番焚庭断面（北から）



長東坊師窯跡 登り窯A-A'ライン横断面（北東から）



長東坊師窯跡 登り窯B-B'ライン横断面（北東から）



長東坊師窯跡 登り窯盛土部分（北西から）



長東坊師窯跡 同上 断面及び瓦積み検出状況（北東から）



長東坊師窯跡 登り窯北側瓦積み（北東から）



長東坊師窯跡 同上 西側瓦積み（西から）



長東坊師窯跡 登り窯西側瓦積み拡大（西から）



長東坊師窯跡 同上 及び増築以前の窯（南から）



長東坊師窯跡 建物調査前（北から）



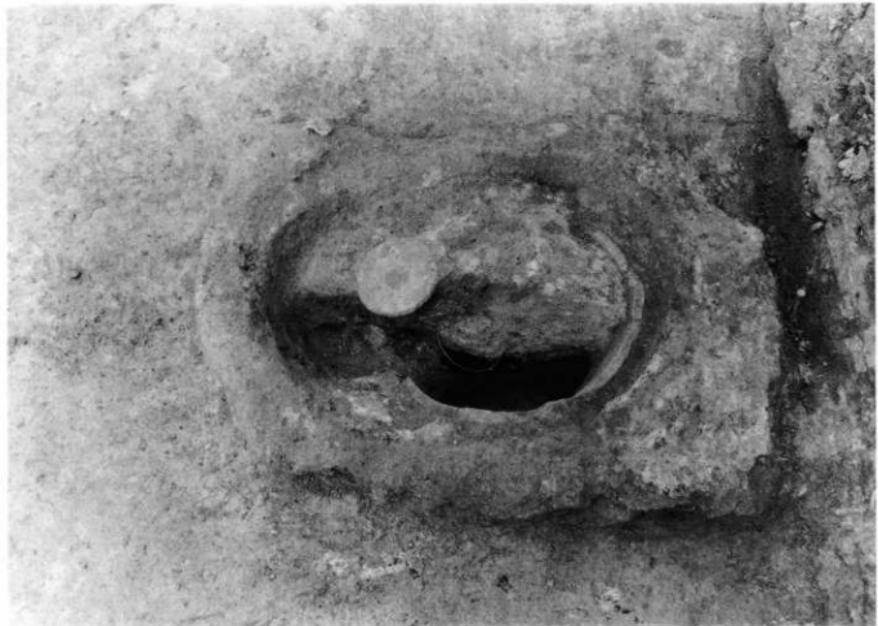
長東坊師窯跡 建物（北から）



長東坊師窯跡 土坑 1 (北から)



長東坊師窯跡 土坑 2 (東から)



長東坊師窯跡 土坑3（南から）



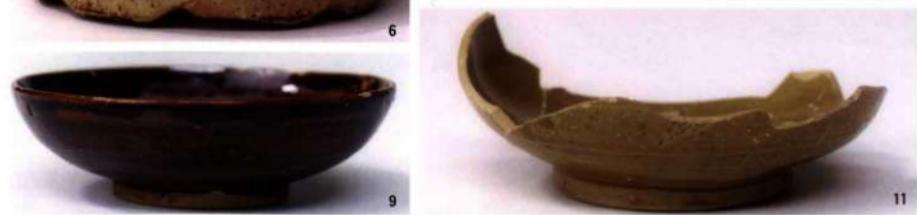
長東坊師窯跡 土坑4（北東から）



長東坊師窯跡 土坑 6 (東から)



長東坊師窯跡 同上 調査風景 (南東から)



長東坊師窯跡 建物出土陶器



12



15



13



16



14



17



18

長東坊師窯跡 建物出土陶器



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



33



32



34



35



36



38



42



長東坊師窯跡 出土陶器

57 64



74



77



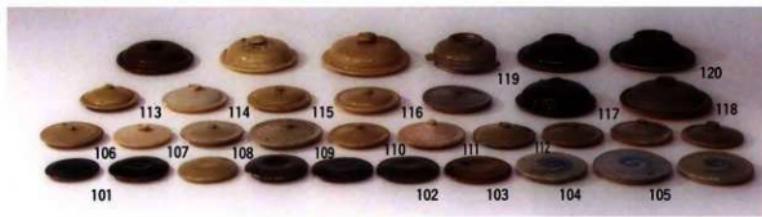
78



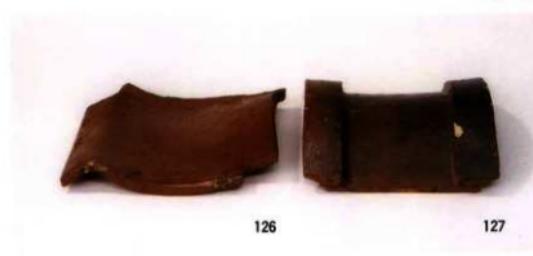
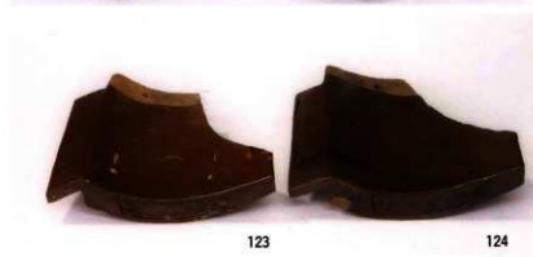
80



長東坊師窯跡 出土陶器



長東坊師窯跡 出土陶器



長東坊師窯跡 出土陶器・瓦・金属器・窯道具

写真図版58



135



136



137



138



139



140

長東坊師窯跡 出土窯道具・磁器